
魔法少女リリカルアーカード

Oji夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルアーカード

【Nコード】

N6015Y

【作者名】

Oj1夏

【あらすじ】

英国崩壊事件から数十年が経った。HELLSINGに復帰したアーカードは吸血鬼退治の任務を受けて日本へと飛ぶ。しかし彼（女）を待っていたのは吸血鬼ではなく魔法使い。吸血鬼の闘争が今、次元の壁を越える。

のんびりと更新します。ご感想やご意見は感想板かweb拍手にてどうぞ！。

それは不思議な出会いだ

「ではHELLSINGにはそのように」

「了解した。確かに伝えよう」

ここは日本国の海鳴市。その一角にある巨大な屋敷の一室だ。そこには美しい女性と可愛らしい少女が机を挟み微笑みあっていた。だが彼女達から立ち込めるのは血の臭いだけ。

「しかしミス月村。私はこんなにも早く事態が収拾するとは思って
いなくてね。」

英国からの迎えが来る2週間後まで寢床が無いのだよ」

棺桶はあるのだがね、と少女は肩を竦め笑う。

「あら。我が家に逗留を希望するのかしら」

「可能ならばお願いしたい。迎えを催促しても良いのだが、今本部
には誰もいなくてな。主も僕もヴァチカンに向かっておるのだよ」

「教会本部……。HELLSINGも大変なのね。英国事件からも
う数十年は経つのに」

月村忍は思い出す。
表向きには大規模テロリズムによる英国首都の崩壊と発表された事
件。

一時期世界を震撼させたその大事件は今も話の種には事欠かない。

そして表向きではなく裏の事情。

それは自分と同じ存在を含めたいくつかの勢力が英国本土で戦争を起こしたという事。

忍の目の前に座る少女もその戦争の当事者である事。

まあそれを知ったのは、この少女が今回自宅を訪れた時なのであるが。

「まあ、な。我々王国国教騎士団が絡んだ事件だ。知らぬ存ぜぬで通せるわけもあるまい」

とある事情で長年の間姿を晦ましていた自分が再び現れた事で再三に渡る教会本部からの呼び出しに応じた老いた主、ついでに僕の婦警に同情する少女。

そんな眉を潜めている少女を見てクスクスと忍は笑った。

「むっ。何故そこで笑う」

「べ、ごめんなさい。かのドラキュラ公がそんな顔をするとは思わなくて」

忍は思い出す。

先日突如現れた謎の血の権化たる少女。

この少女は吸血種、”夜の一族”と呼ばれる月村家を抹殺するためを送り込まれた英国組織からの刺客であった。

しかもその正体は”始まりの吸血鬼”と呼ばれるかのドラキュラ伯爵。

自分と同じ存在ではあるその格は一線を画す物だ。

そんな存在に命を狙われた時点で消滅は絶対。忍は死を覚悟した。だが、そんな万が一にも勝ち目の無い勝負に槍を入れ事態を収拾し

てくれたのは月村忍の恋人、高町恭也であった。

「ふん。むしろ貴様こそ随分と人間臭いではないか。それもあれか、あの男の影響か？」

「ええ。恭也のお陰よ」

人と共に生きることを望んだ忍。

吸血種と生きることを望んだ恭也。

二人に加え彼らを守らんとする人々に毒気を抜かれた刺客の少女は『彼の者らに害意無し』と本部へ通達する事に決めたのだ。その折、人間とはやはり素晴らしく面白い、と少女は笑っていたそう。

「羨ましいな。人を捨てた私には二度と手に入らない物だ。

——それはともかくしばらく厄介になるぞ、ミス・月村」

「ええ。歓迎しますわミス・アーカード」

こうして極東の島国に世界を揺るがした吸血鬼が滞在する事となった。



「ん？ 客人か」

「あ。アーカードさん」

月村邸に世話になってから三日目。

早めの起床（時計は午後6時を指しているが）をしたアーカードは月村邸の玄関ホールにて月村家の次女とその両隣に並ぶ二人の少女を見つけて声をかけた。

一人は長い金髪を持つ勝気な目をした少女。

「ア、アリサ・バニングスです。初めまして」

だがそんな彼女も威圧感溢れるアーカードを前にしてはどこか気後れ気味だ。

黒髪の美しい、中学生位の身長のアークードからは威圧感だけでなく、気品や貫禄さえ感じられる。

彼女が身につける質の高そうなコートもそれを深く印象付けた。

「アーカードだ。イギリスへの帰国の折まで月村家で世話になっている」

本来なら人間の少女にこのような挨拶をしないアーカード。

だがここ数日の彼女は月村家や恭也の付き合いを傍から見ており、機嫌がすこぶる良かったのだ。

人間と吸血種の恋慕。それは両種の新しい可能性をアーカードに感じさせていた。

だからアーカードはすずかの友人であろう人間の少女に珍しく声をかけたのだ。

「は、初めまして。高町なのはです」

もう一人の少女、栗色の髪を持つ少女がアーカードに挨拶をするが

「（ほう……）」

なのはを見た瞬間、アーカードの顔は微々たる物だが驚きに包まれる。

しかしすぐに微笑を作ると三人の少女へと告げた。

「私は、すずかと忍とは親戚のような者だ。これから姉妹共々仲良くしてやってくれ」

そう言ってアーカードは手を振ると微笑みながら食堂へと向かった。

「……すずか。あの人本当に親戚？　なんか……格が違う、て感じがしたんだけど」

「うん。ライオンさんと喋った感じなの……」

「え、えーと。確かに親戚……かな？　見た目はともかく良い人？　だよ」

「なんで疑問系なのよ」

幼い彼女達の感性は正しくアーカードの本質を見抜いていたらしい。いつの間にか姿を霧のように消したアーカードの後姿を視線で追う三人だった。



「……よく飲みますね」

「良い夜だからな。こんなにも月が美しければ血も飲みたくなるものさ」

アーカードは月村邸のバルコニーで夜空に浮かぶ満月を眺めながら輸血パックから血を飲んでいた。

そこへやって来た忍が眉を顰めながら尋ねたのだ。

「ミス月村。お前も一杯どうだ」

「結構です。私達は血液を摂取せずとも延命できますから」

「なんだつまらん。郷に入らば郷に従えとはこの国の言葉だったか。まさか吸血鬼にまで及ぶとは驚きだ」

それって日本人が遠慮しがち、てことかしら。

と忍はツツコミたかったのだが上機嫌のアーカードにそれを言うのははばかれた。

事実、月村の夜の一族は血への依存が他の同類と比べ薄い。

「そうだ。先ほど、なのはと名乗る少女と会ったのだが彼女はあの人間の血縁者か？」

ちゅーちゅーと可愛らしい音を立てながらストローで血を飲むアーカードに苦笑しながら忍は答える。

彼女の言うあの人間、高町恭也の事だろう。

「なのはちゃん？ ええ、恭也の妹で高町家の次女よ」

「成程。合点がいく」

ズズー、と五つ目の輸血パックを飲み干すと次に手を伸ばすアーカード。

その質問に眉を顰める忍だったが

「彼女から尋常じゃない生命力を感じたので気になっただけさ。

あの人間の妹か。なるほどなるほど、それならば納得だ」

なのはから感じられた溢れんばかりの生命力。その正体を知るものならばそれを魔力と呼んだであろう。

人ならざるアーカードは漠然ながらその魔力を感じることが出来たのだ。

あの、人間らしくも人間らしくない高町恭也の妹。

それならばあの生命力を保有する理由に足るだろう。

一人納得したアーカードは人間の可能性をまたも見出し更に上機嫌になっていく。

ミレニウムとの闘争からはや数十年。

かつての宿敵だった神父もまた人間だったな、と思い出し月を見上げ笑うアーカードだった。

そしてそんな少女を不思議そうに見る忍だった。



それはアーカードが彼女たる理由で深夜の海鳴を散歩している時だった。

見るからに高そうな白いコートを着た長い黒髪の美少女が一人、夜の道を歩く。

良からぬ事を考える輩もいたにはいたが、事を実行しようとした瞬間にアーカードの一睨みで硬直してしまっているのであった。

任務は終わった。ならばかの日本を観光するのも悪くはあるまい。主と婦警に土産でも買って行ってやるか、と夜の商店街へと向かう途中

——誰か助けて——

「む？」

アーカードの深層意識（自我）にまで届く声が聞こえた。

これを気のせい、と捨て置くほどアーカードは”普通”ではない。

「……精神感応の類か？」

懷に忍ばせている巨銃に手を伸ばす。

この国の警察に見つかったら間違はなく卒倒されるであろう程に物騒な彼女の牙だ。

現在残る（二つあった双銃の片割れは既に無い）白い454カスール・オートマチックに手が触れた瞬間

——助けて！——

「……クッ」

先ほどより切羽詰った声を”感じた”方角へ脚を向けるアーカード。今回の任務は血を見る前に終わってしまった。

それが悪いとは言わないがどうにも燃焼不足とも言えたアーカード。
だからだろうか。ソレを求め深夜の街を徘徊していたのは。

「助けてやろう救ってやろう。だが用心しろよ？ 私は救世主^{メシア}では
なく化物^{フリークス}だからな」

銃を片手に白い少女が夜を駆けた。

それは不思議な出会いだ（後書き）

原作ほどアーカードさんは尖ってないかもしれない

魔法の呪文はリリカルだ (前編)

「なんと奇怪！ この銃弾を食らって平気なフリークスがいたとはな！」

先ほどから轟音を響かせているのはアーカードの愛銃、・454カスールの銃口と

『G A A A ! ! !』

ジュエルシードと呼ばれる次元干渉型エネルギー結晶体から発生した思念の暴走体であった。

ランチエスター大聖堂の銀十字錫を溶かして製作された弾丸はアンチキリストの悪霊にその真価を発揮する。

しかし暴走体は、持ち主の思念が暴走した事による文字通りの思念体。

実体と宗教的概念を持たない眼前の暴走体には効果が薄かったのだ。

「H A H A H A H A ! ! !」

しかしアーカードは楽しそうに銃弾の雨を降らせる。

彼の復活を予見……否、信じていた主、インテグラによってその銃弾は随時製作されており残りの弾数にも余裕がある。

それに加えまさかの不死性を持つ未知の敵の出現に心躍らぬはずがないのがアーカードという化物だ。

簡易的な魔術、遮音結界によって住宅街にも関わらず彼女達の闘争に気付く者はいない。

破壊された器物等については後で月村家に修復を頼めばいい、と漠然とアーカードは考えていた。

「そら、私はこちらだぞ」

闇に溶け、再び現れた場所が暴走体の真後ろ。

暴走体が振り向いた瞬間

「会いたかったよハニー」

壮絶な笑みをバックに、454のマズルフラッシュを帯びた弾丸が暴走体の顔面を穿つ。

『!?!?!?』

質量兵器にも関わらず内包された神秘によって多少のダメージは入っているらしい。

それは暴走体の叫び・慟哭から判断できる。
しかし

「拉致があかなあ……」

この時彼女が消費した弾丸は既に50を超えていた。

多少ダメージが通っているとは言え、いまだ健在である眼前の敵を見て舌を打つアーカード。

「イスカリオテの連中に任せておいた方がよかったか？」

無茶を言う。

彼らは現在インテグラと共にヴァチカンだ。

日本にも支部があるにはあるがそれは首都東京に置かれている。今から増援を呼ぶにはとてもではないが間に合わない。そもそもアーカードは彼らを頼る気など持ち合わせていない。

「ちい。私を呼んだ誰かさんはどこにいやがる」

暴走体の触手がアーカードへと迫る。

それをギリギリで回避するが自慢の黒髪が数本刈り取られた。

「貴様、乙女の髪を弄ぶか」

マスターは男でしょう、髭でしょう。

と、どこぞの婦警のツツコミが聞こえた気がしたが無視した。

やれやれ、と首を振りアーカードは銃を仕舞う。

銃による制圧が利かないのであれば残る手段は彼女の切り札。

まるでこれから誰かを抱きしめるかのような格好をしながら禁断の言葉を呟いた。

「――術式開放」

アーカードの両目が開かれる。

そして同時に周囲を濃厚な血と闇の匂いが充満していく。

深夜の住宅街。そこに満ちる闇を更なる深く、濃い闇が上塗りしていく。

その瞬間、暴走体の放棄したはずの本能が警報を鳴らす。

――ナンダコレハ！

一気に距離を取る暴走体に向かって

「お前はどんな味がする？」

とっても楽しみだ、と再び壮絶な笑みを浮かべた少女が闇の中からヌルリと言葉を発した。

と、その時だった。

「ソレに通常兵器では太刀打ちできません！」

「なに……？」

どこからか子供の声が聞こえたのだ。

アーカードは術式の展開を中断し周囲を見渡す。

遮音結界を張ったこの戦場に子供が？

不思議に思うアーカードの視線の先には、私服姿の少女が立っていた。

知っている。

アーカードはその少女を知っている。

「高町なのは」

そう、アーカードを説き伏せた人間、高町恭也の妹だ。
しかし先ほど聞こえた声は彼女の物ではない。一体どこから？

とアーカードが首を傾げた時だった。

「それに対抗するには魔力を伴った攻撃が必要です！　これを！」

なんと高町なのはの肩に乗っていた小動物が喋り、あまつさえその小さな手に持った赤い宝石をアーカードに投げてよこしたのだ。

「（使い魔だったのか）」

だが別段驚くことが無いアーカード。

多少なりとも魔術に精通している彼女にとって喋る動物、所謂使い魔は珍しくもないのだ。

昔の話だが、喋る猫（のような少年）や喋る（事はあるまりなかった）狼とも交戦経験のあるアーカードだ。当然かもしれない。

受け取った赤い宝石をまじまじと見るアーカード。

「概念武装？　神秘など欠片も内包していないようだが」

『I am magic employment type arms（私は魔力運用型の兵器ですから）』

「なっ」

今度こそアーカードは驚く。

これまで数々の神秘的な概念武装を見てきたアーカードであったが、喋る類の物は見たことがなかった。

「僕の後について起動呪文を！」

「……トリガーワード？」

アーカードの疑問を他所にユーノは続ける。

先ほど危機を感じ距離を取った暴走体が再び襲撃のチャンス伺っていたからだ。

「我、使命を受けし者なり。契約のもと、その力を解き放て」

「……我、使命を受けし者なり。契約のもと、その力を解き放て」

訝しみながらも後に続くアーカード。

——何故だろう、嫌な予感しかない。

先ほど魔力を伴った攻撃が必要、と言われたのだがその程度ならアーカードにも可能である。

——なぜこのような儀式めいた契約の類の呪文が必要なのだろうか。

「風は空に、星は天に、そして不屈の心はこの胸に」

「……風は空に、星は天に、そして不屈の心はこの胸に」

彼女の悪い予感はこの数瞬後、現実のものとなる。

後にアーカードはこう語っている。

「次にあの言葉を私の前で口に出してみろ。ぶち殺すぞ人間^{ヒューマン}」、と。

「この手に魔法を。レイジングハート、セットアップ」

「この手に魔法を。レイジングハート、セツトアップ」

次の瞬間、赤黒い魔力が宝石、レイジングハートとアーカードを包んだ。

これこそ彼女の魔力光。血の色みたい、となのはは感じた。

濃密な狂気を内包した魔力が周囲を襲う。

それだけでなのはとユーノ、はては暴走体すらも言葉を失う。
なのはに至っては尻餅すらついてしまっていた。

そんな殺意と恐怖で塗り固められた魔力の霧が晴れ、その場に立っていたのはただ一人。

吸血鬼が普段着ている純白のコートの更の上。

真っ赤なフリル付きの軍用コートの様なジャケットを羽織い、中心部にレイジングハートのコアを付けた真紅の槍を持つアーカードであつた。

ま、まほーしようじよだ！

ここにいるはずのない婦警の驚愕の言葉が響いた。

「……」

そして誰も喋らない。

なのはとユーノは畏怖で。

暴走体は純粹な恐怖で。

そしてアーカードは燃えるような憤怒によって。

「――喰らえ、ヴァスカヴィル」

暴走体が気付いたときには全てが遅かった。

アーカードの足元、血色に染まった影から巨大な黒い犬が出現し、そのアギトで暴走体の上半身を食いちぎる。

ブラックドッグ
すぐさま反転した黒犬はそのまま残った下半身を飲み込む。

「肉片魂一片たりとも残すな。全てを喰らえ（イートオール）」

分体、もしくは主の命を受け残滓すらも喰らい尽くすその黒犬の姿にアーカード以外の人物、レイジングハートでさえも言葉を口に出すことは出来なかった。

・
・
・

「小僧」

無言の闇の中、アーカードの声が響く。

圧倒的な光景に飲まれ喋ることさえ許されないその空間でユーノに

向けられたであろうその言葉に全員が反応する。

「契約の破棄の方法を教えろ」

「えっ」

「ハリイ」

こちらを見ず、背中越しに喋る赤と白を纏った黒髪の鬼。
その言葉には絶対の殺気が込められていた。

——ここで返答を誤ったら僕は死ぬ。

そう本능が全力をもって告げる。

ユーノは何度も噛みながらレイジングハートの所有権限破棄の呪文
をアーカードへと教えた。

・
・
・

契約を破棄し、待機形態の宝石に戻ったレイジングハートをアーカ
ードが背中越しに乱暴に投げる。

わわっ、とそれを胴体でキャッチしたなのは。

「それは貴様が持て。私には不要な物だ」

「で、でも——」

「魔力の運用ならば媒体デバイス無しでも可能だ」

そう言って歩き出すアーカード。

ビリビリと体全体から発せられる怒気になのは何も言えず、ユーノに至っては安堵と恐怖で泡を吹いて気絶していた。
闇へと消える少女。彼女は何を思っているのか。

こうしてPS事件と呼ばれる幕が上がる。

なのはとユーノは後日改めてアーカードに事情を話し、聞くことを恐怖しながら考え

アーカードは新たな闘争に心躍らせながらも

「ミス・アーカード？　そ、その位にしたほうが」

「黙れ。貴様も飲むぞ」

忍に止められながら自棄酒（血）を煽っていた。

魔法の呪文はリリカルだ (前編) (後書き)

ギャグ臭くなっちゃいました。

この作品はアーカードが大暴れする予定だったのにいきなり雲行きが怪しく。

HELLSING原作後、アーカードが騎士団に復帰した少し後のお話です。

魔法の呪文はリリカルだ (中編)

『はい、どなたですか？』

インターホンを押すとすぐに返答が来る。

満足そうに少女は頷くとインターホンへと口を近づけ

「私だ」

少女らしくもどこか大人びた凜とした高音が発せられた。

『っ！ アーカードさん……？』

高町士郎の息を呑む音の後に高町家の玄関を開き、恭也が少女を迎え入れる。

仕事を終え、家族が家に揃った夜。アーカードは高町家の門を潜った。



「アーカードさん。お話とは？」

高町家のリビングには現在アーカードの隣に肩にユーノを乗せたなのは。

向かい側にはなのは以外の高町家の人間が座っていた。

カタカタと震えているのはとユーノ。

アーカードが呼んでいる、とリビングに呼ばれた二人は心臓が飛び

出るくらいに驚いたそうだ。

「キナ臭い話をするつもりはない。何、ただの進路相談だよ」

高町桃子に用意してもらった日本茶を啜るアーカード。

どうやら月村家に関する話ではないらしい。士郎と恭也は安堵のため息を吐いた。

確かにあの件は一応の終着を迎えている。今更どうこう言うつもりはアーカードにも無いのだろう。

そもそもこのような裏の世界に無関係とも言える桃子となのは話し合いの場に交えているのだから。

「進路相談？ 恭也を騎士団へ推薦でもするのですか？」

士郎が問う。

ちなみにこれは先日ふざけ半分でアーカードが提案した事だ。

「魅力的だな。恭也だけでなく士郎も是非入団して欲しいところだが……」

アーカードは ちら、とりびんぐを含めた高町家の家族を見る。

王立国教騎士団、HELISINGのような血みどろのゴミ処理部隊にこのような人間達をぶち込むのは気が引ける。

頭を振るとアーカードは続けた。

「今回は別件でな。主役はこの幼子、高町なのはに関する事だ」

グイ、と隣に座るなのはの頭を掴み（撫でり）ニヤツと笑うアーカード。

当のなのはと肩の上に座るユーノはガタガタと震えてしまっている。

先日の闘争の光景がまだ忘れられないのだろう。

突然、末っ子を主役と言われた事で高町家は驚く。

”あの”アーカードがなのはに目をつけた？

何の悪い冗談か、と全員が顔を顰めるのを見てアーカードは笑う。

「そら小僧。出番だ、私も含めこの者達に事情を話せ」

アーカードはなのはの頭をかき回していた腕をそのまま移動させ、ユーノを掴むとテーブルの上に置く。

ちょこん、とテーブルの上に置かれたユーノは一度深呼吸をすると

「は、初めまして。ユーノ・スクライアと申します」

高町家の面々がまたも驚く中、ユーノは自分が置かれている現状の説明を始めるのであった。



「なのはが……魔法を？」

「ジュエルシードか。確かに放っておく訳にもいかないな」

ユーノから語れたファンタジックな話の数々。

御神の剣士としていくつかの超常を経験してきた士郎と恭也でも驚くべき内容だった。

桃子と美由紀に至っては啞然としてしまっている。

当のなのはでさえ次元世界や管理局といった巨大なスケールの話

聞いて言葉が出ないようだ。

「文字通り、世界は広がったのだな」

そしてアーカード。彼女は腕を組み顔を顰めながらも薄く笑っていた。

まさか異世界の話だとは彼女も思っていなかった。

人外の彼女でさえ、知る世界は地球一つ。ユーノはそれ以外に存在する次元世界をいくつも跨いできたというのだ。

「じゃあ貴方は一人でジュエルシードを集めようと？」

最初に復帰したのは桃子であった。

伊達に猛者ぞろいの高町家の母をやっていないのであろう。相当に強い心を持っているようだ。

「は、はい。その過程でなのはさんとアーカードさんに助けて貰ったんです」

そしてなのはが助力を買って出てくれた、と続ける。

「成程。進路相談っていうのはそういうことか」

士郎が腕を組み唸る。

「お父さん、どういうこと？」

美由紀だ。先日現れた吸血鬼の少女の事でさえ驚いたのに、今度は妹が魔法と出会った、と聞かされた。

姉として落ち着いた様子を見せてはいるが内心はかなり混乱してし

まっている。

「……なのはユーノ君の手助けをしたんだな？」

「う、うん。私に出来ることがあるんだったら手伝わせて貰いたいの」

「……そうか」

目を閉じ思慮にふける士郎の言葉に緊張しながら答えるなのは。士郎はなのはがこのように自分の考えや意思を表に出してくれている事を素直に喜んでいた。だが事が事だ。命に関わるような事なのだから安易に許可を出すわけにはいかなかった。

「俺は反対だ」

沈黙を破ったのは恭也だ。

「なのははまだ幼い。

魔法の資質があるからと言って、戦場になるかもしれない妹を送ることなんて許せるわけがないだろう」

「お兄ちゃん！」

冷徹な兄の意見になのはと美由紀が声を荒げようとした。それを見て慌てて恭也が弁明する。

「か、勘違いするなって！ 何もユーノ君を見捨てろ、とは言ってるわけじゃないんだ。

彼には俺と父さんが協力しようと思う」

「い、いえ！ 皆さんを巻き込むつまりは——」

「ユーノ君。俺達から見れば君もまだ幼いんだ。子供を助けるのが大人の務めだからな」

そう言って父と同じように腕を組む恭也にユーノは頭を下げた。

確かに自分一人では21個に散らばったジュエルシード全てを集めるのは難しいだろう。

最初の一個でさえなのはとアーカードに協力させてしまった位だ。ここはお言葉に甘えるしかない、とユーノは考えた。

「……ありがとうございます。一刻も早く管理局に連絡を取ってみます」

「ああ、異世界の警察みたいなものだっけ？」

先の次元世界の説明で出た管理局という言葉を思い出す恭也。

実際は司法も扱う巨大な組織なのであるが簡単な説明をするため警察に例えたユーノだった。

「はい。今はまだ通信が届かないのですが、管理局巡洋艦の巡回コースに地球の近くを通るルートがあるんです。艦がそこを通る時に連絡を試してみます」

「それはいつ頃になりそうかな」

「そうですね……恐らく四日か五日後かと」

じゃあそれまでは俺と父さんで協力をしようと思う、と恭也が言おうとしたその時だった。

「なのは。お前は どうしたい？」

これまで黙っていた士郎が突然なのはに問いかけたのだ。驚いたのは、なのはだけでなく恭也と美由紀。

「「父さん!？」」

「なのはがどう考えているのか、俺はそれが知りたい」

グッと拳と口を紡ぐと恭也は立ち上がろうとしていた姿勢をそのまま椅子に戻す。

なのはは下を俯いたと思うと力強く士郎の方に向き直り、言った。

「私はユーノ君の手伝いがしたい。私にも出来る事があるんだったら尚更なの!」

先と同じ事を言うなのは。

どうやらその意思は相当に固いらしい。

士郎は考える。

自分の責任で極度の滅私を強いられるようになってしまった娘の事を。

そんな娘が自分の意思をこうも強くぶつけてきた事を。

「いいんじゃないかしら」

士郎の変わりに是と唱えたのは母親の桃子だった。
そんな母を恭也は軽く睨むのだが

「なのはが決めたことですもの。それにその考えは間違ったものじゃない。親の私はそんな娘を応援したいわ」

「お母さん……」

「ふう、そうだな。なのはが決めたことならば構わない。ただし、俺と恭也が危ないと判断したらすぐに止めるんだぞ？」

「お父さん！」

なのはは涙を浮かべ喜んでいた。

そんな妹の姿を見て恭也も諦めたのかヤレヤレ、と首を振っていた。
ユーノも先ほどから頭を下げっぱなしだった。

・
・
・

「断る」

有無を言わさぬ拒絶の意を示したのは今まで喋ることの無かった吸血鬼、アーカードであった。

口を挟まなかった理由はなのはや士郎、高町家の人間達が己のあり方を示し合わせる場を傍観し楽しむためだった。

しかし自分へと協力の要請がされた瞬間にピシヤリ、と湯のみをテーブルに置くと同時にアーカードはそれを拒否したのだ。

「そも私はHELLSINGの人間だ。主の命令無しに動くことは主義に反する」

なんとも忠誠心の高い理由だが本心はそこではない。

あのふざけた格好、バリアジャケットを再び着ることを本能が頑なに拒絶しているからだった。

「だけどアーカードさん。これは俺達だけの問題じゃないんです。果ては世界の存亡が掛かっているんですよ」

恭也が説得を開始する。

恭也と士郎、月村家のメイド二人、能力を発動させた忍を含めた合計五人を軽くあしらってしまいう程の超戦力を保有するアーカード。彼女の協力は是が非でも取り付けたい所であったが

「くどい。私の力が欲しいのであれば主を通せ」

がんとして首を縦に振らないアーカード。

そんな彼女を見てなのはが爆弾を投下してしまう。

「アーカードさん、あの格好似合ってたのに……」

瞬間、高町家の家族が長年を掛けて蓄積した暖かな空間、リビングを濃厚な闇と殺意が塗りつぶす。

士郎と恭也、美由紀は臨戦体勢を、なのはを庇うかのように前に立つ桃子。ユーノは魔力を体に巡らせる。

「ほう……ほうほう？　なのはやなのは。もう一度言ってみてくれ。長生きしすぎたせいかな。」

耳が遠くなってしまったようだ。そら、もう一度言ってくれよぶち殺すぞ小娘」

物凄い形相で九歳の少女を睨まんとする数百歳のアーカード。実に大人気ない。

モロにその視線を受けた桃子は身震いし硬直、直接アーカードを見ていないのはさえもヒツと息を吞んでしまった。

「ア、アーカードさん！」

「何だアニマル」

「ア、アニマル……。レイジングハートの所有権限はなのはさんに譲渡されているのでアーカードさんがもうバリアジャケットを着る必要はありませんよ！」

ユーノはいち早くアーカードの真意を見抜くと事情を説明する。

このままではこの家はおろか周囲一体が存在すら危うい事態に陥ってしまう、とユーノの本能が警告してきたのだ。

「む。そうなのか？」

周囲を飲み込みつつあった闇が一瞬で霧散する。

士郎と恭也がドウ、と椅子に身を沈める。美由紀となのはは尻餅をつく様にテーブルに体を伏せてしまった。

「何だ。それならそうと早く言え。ならば協力するのも吝かでは無いな。私も新たな闘争を待ち望んでいたところだ」

一転機嫌が良くなったのかアーカードは桃子に笑いかけながらお茶

のオカワリを催促する。

冷や汗を掻きながらも桃子は新しいお茶を用意しに台所へと向かう。

ユーノは思った。

もしかしたらこの少女はジュエルシードよりも危険な存在なんじゃないか、と。

実に今更である。

なのはは思った。

アーカードに向かってバリアジャケットの話をするのは未来永劫絶対にならない、と。



「では私の自己紹介もしておこうかの」

リビングにいる高町家とユーノを見渡すアーカード。

協力の意を示した彼女は改めて自己紹介をすることにしたのだ。

「私はアーカード。英国の一組織である王国国教騎士団（HELL SING）の者だ。此度はとある任務を受け来日した。

だがそれも既に終わり、帰国までの間月村家に厄介となっている」

ちなみにアーカードは自身が吸血鬼、という素性については話すつもりは無い。

士郎、恭也、美由紀は既知なのだが、なのはとユーノにはそれを秘匿しておくつもりである。

理由は二つ。

まずはソレを知らればなのはは自ずと月村姉妹の素性に辿り着くだろう。

本人達もこのような形で夜の一族としての身上が漏洩する事を望んでいない、とアーカードは判断した。

次に管理局という存在だ。

管理外扱いとされ注目されていないこの世界に、上位文明技術を保つ有する管理局の関与を防ぐため。

不死性と超火力を持つ吸血鬼の存在が管理局に知られればその後、この世界がどのような扱いを受けるか分からぬ程アーカードは愚かでは無い。

ゆえに自分の力についてはこう説明した。

「私はこの世界独自の魔術師だ。そして私の力は特殊でな。血を媒介とする事で様々な現象を具現させる。先の黒犬もその類である」

「成程……稀少技能^{レアスキル}だったんですね」

ユーノ曰く、レアスキルという稀に発現する特殊な技能が管理世界では知られているらしい。

これは好都合、とアーカードは頷いておいた。

「そう捉えて貰えば構わん。件の能力もあってな、私はHELSSING以外の組織に関与するつもりはない。管理局とやらに至ってもそうだ」

「では管理局が来るまでの間は僕たちに協力を願えるか？」

「そうさな。組織というものが動くのであれば私も主の意向を仰がねばならん。個人として動けるのはそれまでだ」

お茶を飲み干すと立ち上がるアーカード。

既に夜は吹け、時計の短針は10の数字を示している。

彼女にとっては昼時のようなものだが、ここにいる人間たちにとってはそうではないだろう。

一応気を遣い暇（ひとやすみ）を選んだアーカードであった。

玄関を出た瞬間に闇に溶け、消えるアーカード。それを驚きながら見送った高町一家とユーノ。

なんとかアーカードの協力を取り付けることができた高町一家は全員が安堵のため息を吐く。

なのはも魔法の事とユーノへの協力の件をこんなにも早く家族に打ち明けることが出来てどこか喜んでいるようだ。

ユーノはそんな彼らを巻き込んでしまったことへ申し訳なさを感じ、一層ジュエルシードの捜索に向け身を入れるつもりである。

「しかし驚いたな。彼女がこうもあっさり協力してくれるとは」

頭を掻きながら恭也が呟く。

「彼女が望むのは闘争だ。今回の一件、そんな彼女が興味を見出したんだ……荒れるぞ」

士郎は目を閉じ難しい顔をする。確かに、と恭也も顔を強張らせた。

二人の男性はそんな様子を娘や妹に見せないよう、未だ家の中に入ることは無い。

そんな二人を闇の中、月だけが静かに見下ろしていた。

■
「ミ、ミス・アーカード。だから飲みすぎでは……」

「いやなに。今の私はすこぶる機嫌が良い。処女以外の血も今なら啜ってでもいいくらいだぞ？」

ほんのり顔を赤くした忍はアーカードを睨む。

「……最低です」

「クククク、生物の意思を組んだ思念の暴走体、か。純粹な意思というのはさぞや強いのだろうか？ 血沸く、血沸く！」

？ と首を傾げる忍。昨日に続きアーカードの考えがまるで分からない。

吸血種も伝説級とあればどこかネジがぶっとんでるわ、と一人納得することにした。

月村邸のテラス。

昨日に続き大量の血を飲むアーカード。

そろそろ保存していた輸血パックが切れそうね、と忍は心配しているのだが

知ってかしら知らずか、アーカードはいたくご機嫌で更なるオカワリを要求したそうだ。

こうして吸血鬼は魔法と関わることとなった。
それがどんな結末を生む事となるのか。
ソレは未だ誰も知らない。

魔法の呪文はリリカルだ (中編) (後書き)

次回外伝。

アーカード以外のHELSSINGメンバーは今何を？
そしてアーカードが知らぬところで暗雲が！

そのころHELLSING (外伝) (前書き)

二話と三話の間位のお話です。ちょっと短めです。
次の話は今夜に更新します。

そのころHELLSING（外伝）

「インテグラ様ー」

間延びした女性の声が自家用航空機の機内に響く。

その声の持ち主は赤黒い軍服（軍用にも関わらずスカートの丈は短い）に身を包み、金髪を短く整えた女性である。

片腕をロンググローブで覆い、口内には鋭く伸びた犬歯が伺える。それは彼女が人外の者である証であった。

インテグラ、と呼ばれた女性。本名をインテグラル・ファルブルケ・ウインゲーツ・ヘルシング。

シートに身を沈め、これから寝ようとしていた彼女の年齢は既に還暦を越えるお婆ちゃんである。

イタリアからイギリスへ向かうこの機内には操縦士達を除くとこの二人しか乗っていない。

「……やかましいぞ婦警。私は疲れているんだ」

羽織った毛布に身をくるみ、セラスから顔を背けるインテグラ。

先日行われたHELLSINGと教会の会議。

あれやこれやと無理難題と質問を吹っかけられ、HELLSING当主のインテグラはその年もあるのかとても疲れていた。

全ての議題が早々に決着をみせ、こうしてイギリスへの帰国が少し早まった事だけが幸いだったろう。

「そ、それがですね。日本に行ったマスターから連絡が入ってまして」

脇に抱えるファイルを取り出しインテグラへと渡す婦警ことセラス・ヴィクトリア。

彼女はアーカードの眷属であり僕である。

「アーカードが？ 連絡？」

珍しいこともあるものだ。

私は見敵必殺と命令を下したはず。

今更異を唱えるような奴ではない。何かあったのか？

受け取った資料を読み始めるインテグラ。

最近になって眼鏡の度を上げたことに若干の憂いがあるのは秘密だ。

「……なんだと」

そこに書かれていた内容。

まずは『標的である日本産の吸血種に害意無し。放置しても何の問題は無いと判断』とある。

それについてはインテグラも文句は無い。

そもあのアーカードが判断したのだ。吸血鬼という種に対しての危機管理能力は自分よりもアーカードの方が高い。

しかし彼女が驚いたのは次に書かれていた内容についてだ。

『異世界文明の事故もしくは事件に遭遇。

異世界の『時空管理局』なる治安維持組織の介入までの間、その解決に助力を与える事とする。

ついではその許可と管理局の介入以後の動きについて指示を求む』

インテグラは目を見開く。

老人とは思えないほどの眼力と迫力にセラスは思わず息を呑んでしまう。

HELSSING当主はこの年にて健在息災であるのだ。

「……時空管理局」

文面に記載されていた異世界の治安維持組織。

その単語一点を見つめるインテグラは資料を握る指に力を込める。

アーカードはその存在を知った時、さぞや驚いたであろう。

そうだ、かくいう私も”驚いた”ものだ。

「い、インテグラ様？ 異世界って本当ですか？」

セラスが恐る恐る尋ねる。

インテグラはむ、とセラスに向き直ると手元の資料を乱暴に放り投げる。

あわわ！ とそれをキャッチしたセラスはそのまま答えを待った。
はぁ、とため息をつきインテグラは返答の言葉を発した。

「本当だ。この地球以外にも世界というのは星の数ほど存在している」

目を瞑り昔のことを思い出すように喋るインテグラ。

セラスはそれを黙って聞く。やはり興味があるのだろうか。

そんなセラスにインテグラは苦笑した。

「その時空管理局なる組織もまた実在する。

以前、その管理局のミスで地球でとあるトラブルが発生してな。そ

の解決に我々が協力したのだよ」

「そんな事があつたんですか」

「アーカードが姿を消していた時期だからな。お前がその尻拭いで世界を飛び回っていた頃の話だ」

あー、あの頃かあ、とセラスは苦い思い出を振り返る。

ミレニウム事件から数年後。HELSSINGがようやく以前の体制を取り戻した頃。

英国本土にてアーカードが好き勝手に暴れまわった事で、生存と逃走を許したミレニアムの残党を刈るためセラスは世界を巡っていたのだ。

あれは疲れたなあ、10年もかかりました、と当時を振り返るセラス。

「だがその事件の終結時にな。ウチの円卓会議の一人が管理局に引き抜かれたのだよ」

「あ、それってグレアムさんの事ですか？」

セラスには心当たりがあつた。

主であるインテグラと同じ年の男性だ。

よく頭も切れ、生命力に溢れる人間だった事を覚えている。

ミレニアムの残党狩りから帰還した時に、そんな彼が円卓メンバーから姿を消していた事が気になっていたのだ。

「そうだ。あのギルの野郎だ。あの軟弱者が抜けた事で我々に若干とは言え損出と損害が出たのだぞ。」

あの糞忙しい時期にホイホイと引き抜かれおつて！
英国人ともあ

ジョンプル

ろう男が金と魔法とやらの目が眩んだに違いない」

ブリブリ怒るインテグラに苦笑するしかないセラス。

多分あの人は優しい人だったからいっぱいの世界を救うためにその管理局つてのに入っただけかな、とセラスは思う。

もちろんその通りでありインテグラもそれは分かっている。

だが損害損出が発生したのは事実でありそれが彼女をイラだたせているのだ。

「まあそのお詫び、というのか。管理局から一つの魔法技術を進呈されてな」

「も、もしかして魔法の杖とかですか!？」

キラキラガラガラ。何を期待しているのか丸分かりな顔でセラスが尋ねる。

「ほう。察しがいいな婦警。奴らはデバイスと呼んでいたがね。確か本部の地下にしまっておいたはずだが……」

「も、もったいない! 何で私やマスターに渡してくれないんですか!!」

それがあれば魔法も使えるんでしょう! 百人力じゃないですか! !!」

相当にテンションが高くなっているセラスにウンザリな表情を作るインテグラ。

まあ気持ちは分かる。何せ”魔法”だ。子供の頃からの憧れや畏怖もあるのだろう。

だが

「ふむ。確かに魔法は使えたぞ」

私も試したからな、とインテグラ。

「ど、どんな!？」

ギラッギラな顔で迫るセラス。

「空を飛べる」

「……あれ」

「ビームが撃てる」

「……ええと」

「変身できるぞ」

「……私、全部出来るんですケド……」

そう、デバイスを使う事で行使可能となる魔法の数々。

そのほとんどはセラス、吸血鬼にとって普通に可能な物ばかりであった。

果てはデバイスを使う魔法使い（魔導師と呼ばれる物らしい）とは違い、

セラス達には不死性というチートのようなアドバンテージがある。

「そういうことだ。お前ら化物に今更”魔法の杖”など必要あるま

い」

「そ、そーですけどー」

ブツブツと文句を言うセラス。

彼女も女の子（？）だ。フリフリの衣装に身を包み、喋る動物マスコットと空を駆ける事を夢見た時期があるのだろう。

だが実際はどうだ？

ゴツゴテの軍服を身に纏い、喋る（口数少ない）狼をブチ殺すために血の翼で空を駆けた。

「そんな魔法少女じゃない！！」

キョエー！ と吼えるセラスにため息が止まらないインテグラであった。

「ともかく。アーカードに伝えておくか。出来る事なら管理局を巻き込んで大暴れしろ、とな」

寧猛な笑みを浮かべるHELLSING当主、インテグラ。

それを見てセラスは思った。その命令を受けた自分の主も多分同じような笑みを浮かべるだろう。

ああ、ご愁傷様です異世界と日本の皆様、ジーザスハレルヤファツキンバイベー。

「……そうだな。本部へ帰ったらデバイスとやらを探してみるか。魔法関連の事件ならば必要になるかもしれん」

インテグラの一言が、アーカードを更なる地獄（彼が喜べない）に

突き落とす事となる。

魔法の呪文はリリカルだ (後編)

お昼時。海鳴にそびえる数々の山の一つ。

その中腹に存在するとある神社の境内にて高町なのははユーノ・スクライアと魔法の杖ことレイジングハートの教導の元、魔法の訓練を行っていた。

そしてそれを見守る一人の男性と一人の女性。

いや、女性というには少々まだ幼さを残すその人物は少女と呼ぶべきだろうか。

もう五月だというのに身に纏うのは厚手の白いコート。

長く美しい黒髪の上にはこれまた白いニット帽を被っている。

「ほー。アレが魔法か。いやはや長生きはしてみろものだな。

魔術については多少なりとも心得はあるが、あのような分かりやすい物は初めて見たぞ」

少女、アーカードは空中にてビーム（魔法らしい）を放つなのを見て感慨深げに呟く。

「アーカードさんも魔法が使えるの？」

その隣に立つ男性、高町恭也は興味がある、といった様子で返答する。

「魔法では無い。魔術だよ。

まあ人間から見ればどちらも神秘に属する超常だ。大した違いはあ
るまい」

アーカードはそう言ったが、実はこの二つには大きな違いが存在する。

魔術とはこの地球で生まれた神秘。

己の持つ魔力を糧にして世界の魔術基盤に働きかける事で神秘を起す物だ。

多くの人間が想像する魔法とはこちらを指すことが多い。

そして魔法。

俗にミッドチルダ式と呼ばれる物らしいが、こちらは魔力をそのまま運用、行使することで攻撃手段に転換する物らしい。

要は魔力の使い方が違うのだ。

どちらかと言えば魔法の方がシンプルで分かりやすいか、とアーカードは考える。

ただ恭也に説明するのが面倒だったので「大した違いは無い」と言っただのだ。

また、魔術とは違い、魔力自体の運用である魔法はデバイスという補助器具が必要だ。

ご丁寧にも非殺傷設定という物があったり、空を飛んだりビームを放つ機能すら備えているらしい。

成程。

異世界にはそのような便利な武具があるのか。

デバイスさえあれば術師の力量を問わず神秘を起せる。魔法とやらが浸透するのも頷ける。

成程。

先日 of 暴走体に対して魔法攻撃が有効、と示しデバイスを私に渡し

たのはそのためか。
確かに魔力を”付加”した程度の弾丸では思念体にダメージは通りにくいな。

アーカードは訓練を続けるなのは達を黙って見守っていた。



「凄いじゃないかなのは」

「え、えへへ。ありがとお兄ちゃん」

先日の会合の後。

レイジングハートの正式な所有者となったのは。

訓練にひと段落を付け、休憩のために降りてきた汗まみれの妹にタオルを渡し褒める恭也。

なんだかんだ言いつつも妹が大好きな兄である。

照れて笑うなのも満更ではないらしい。

くすぐったくなるわ、とはそれを見るアーカード。

「流石に俺は空を飛べんしなあ。少し羨ましいぞ」

「恭也さんにもリンカーコアがあるみたいですよ。デバイスさえあればなのはと同じ位には飛行もできると思います」

ユーノだ。

先日の話し合い以来、なののはの事を呼び捨てで呼ぶように本人から

言われたユーノ。

それについて若干の不満を恭也が持っているのは当然だが、表には出さない大人の男であった。

「うーん。俺は剣士だしな。憧れはあるけどやっぱり地に足を付けてた方が安心できる」

だが高速移動なら俺にもできるぞ、と御神の神足の事を語る。あれには私も驚いたな、とアーカードもそれに頷いた。ユーノがそんなアーカードの方を向き尋ねる。

「そういえばアーカードさんも魔法が使えるんですけどっけ」

「何度も言わせるな。魔術だ魔術。」

なのはのようにバカスカとビームを撃つような真似は出来ん。だが空を飛ぶ事くらいは出来るぞ」

そう言うときアーカードは少女の形を崩し、人間大程の蝙蝠のシルエットに姿を変える。

そのまま空中へ飛び立つのを地上からなのは達は呆然と眺めていた。

「(中々に良い霊地だ。魔力の運用にも適している。……日の光がちとキツイのが難点か)」

空を舞いながらアーカードは口の無い姿で呟く。

吸血種として極上の部類に入る彼女でも伝承通り、陽光は苦手である。

別段死にはしないが苦手な物は苦手なのだ。

「……凄い。変身魔法かな、アレ」

「にゃー。もう豆粒みたいなの」

ユーノとなのはがアーカードのいる空を見上げて言う。

「ま、まあそんな所じゃないか？」

彼女の正体を知る恭也はそれとなくはぐらかしておく。

そんな時だ。地上の三人に精神感応が起こる。

ミッドチルダの念話とは違い、直接的に問答無用で頭の中に声が響く。

発信源は勿論、そんな芸当が可能な空中にいるアーカードだ。

『ジュエルシードだ』

「「「なっ」「」」

突然の報告。

高度を飛行していたアーカードは神社の奥、山林の中をうろつく巨大な犬を発見した。

「（なんとも可愛らしい姿だな。ヴェアヴォルフとは偉い違いだ）」

かつてのナチス残党の一人を思い出す。

アレに比べると脅威が微塵も感じられない。

恐らくそこらの野良犬がジュエルシードの影響で暴走体へと変貌したのだろう。

そうだな、試しには丁度良いか。

『なのは。お前が殲滅しろ』

「は、はい！」

上空からの指示を受けなのはとユーノが駆け出す。

恭也はアーカードを見上げ、いざとなったら自分が援護に、と視線で伝える。

『良いだろう。私は周囲の警戒をしておくとする』

こうして高町なのはの初めての魔法戦が始まった。



「アクセルシュート！」

『accel shoot』

今回の訓練で覚えた射撃誘導弾魔法を発射するのは。
それを見たユーノは一人呟く。

「……やっぱりなのはの魔法の才能はズバ抜けてる」

「そうなのか？」

少し離れたところで戦闘を見守る恭也がユーノの独り言に反応した。

「ええ。射撃魔法はおろか、通常なら飛行だけでも習得するのには数年はかかります。

それをたったの数日で……。地球出身の魔導師は皆、才があるとはミッドチルダでは有名な話です。

ですがこうして実際に見ると驚きますよ」

「そうか。ふふ、まあ俺の妹だからな」

これまで構ってやれる事がなかった末の妹。

そんな彼女がこうして家族以外の人間（？）に評価されるのを見て恭也は満更でもない。

それが戦闘、という日常から逸脱した行為であってもやはり家族が褒められれば嬉しいものだ。

『ふむ。初陣にしてはまずまずだな』

上空よりそれを見守るアーカードの評価も概ね高い。

九歳の少女があのような犬獣を相手に互角以上の戦闘を行っているのだ。

自分が姿を消している間に人間はこうも強くなったのか、と少しずれた感想すら抱いていた。

そんなやりとりをしている内になのはは犬獣を撃破。

暴走体は素体となった子犬へと戻り、思念を汲み取っていたジュエルシードが姿を現す。

なのはがレイジングハートの切っ先をそれに向け、封印魔法を行使する。

こうして二個目のジュエルシードは何事も無く無事に回収する事に成功した。

・
・
・

「見事」

「よくやったぞなのは」

「にやはは、て、照れるよ。それにレイジングハートやユーノ君がいたから出来たんだよ」

謙遜するなのはだが嬉しそうだ。首から下げられるレイジングハートもその心情が影響しているのか数度点滅を繰り返す。うんうんと頷く恭也と無事で良かった、と笑うユーノ。アーカードでさえも笑みを浮かべ腕を組み頷いてくれた。

「いやはや、幼子と侮っていた。よもやこのような見事な闘争を拝見できるとは。

……ふむ。是非とも騎士団への推薦を――」

「だ、だめだだめだ！　なのはをそんな危なっかしい所にはやれん！」

敬語を忘れアーカードの物騒な提案に絶対の拒否を示す恭也。その勢いたるやあのアーカードでさえたじろいでしまう程。

「冗談だ冗談。……ロリコンめ」

「なっ?!　俺は忍が大好きだ！」

「何を言ってるんだお前は……」

ギャーギャーと吼えあう兄と少女を見てなのはは楽しそうに笑う。
こんな平和で素敵な光景が私は好きだ、と。

——うん、私は皆を守るんだ。

そう誓って。

魔法の呪文はリリカルだ (後編) (後書き)

原作2話目終了。

次回は3話、居大樹編の始まりです。

更新は恐らく明日の昼になると思います。ちょっとだけご期待下さい。

街は危険で一杯だ (前編)

「「アーカードさん！ お願いがあります！」」

「むあ？」

土曜の夕方、月村邸。用意された自室。

ベッド兼椅子にしていた自分の最後の領土、つまり棺桶の上で翠屋特製シュークリームを頬張っていたアーカード。

おおよそ彼女らしくないその姿を見て、アーカードの部屋に飛び込んできたすずかとアリサ、なのはは思わず笑ってしまった。

そして今。

「ノックもせずに我が領土に侵入、あまつさえ王の私を嘲笑とな。私の国では極刑に値する」

「ご、ごめんなさい！ お願い事で頭が一杯だったんです！ ご無礼をお許し下さい！ というか国って何？！」

いつの間に、どこから取り出したのかぶっとい縄でグルグル巻きにされ床に転がる少女が三人。

何を隠そうここは月村邸である。どこぞの四次元ポケットばりの不思議空間から縄を取り出されても何ら不思議では無い。

どう料理してやろうか、と調理人さながらの怪しい笑みを浮かべそれを見下ろすアーカード。

命の危機を感じたアリサが必死に弁明を始めるのも無理ないだろう。

二つ目のジュエルシードを封印してから数日が経過した。
昨日は深夜の学校にて五つ目となるジュエルシードを発見、封印した一行。

この調子で、と意気込む一行であったが恭也や士郎、戦闘を呼吸のようにこなしてきたアーカードと違いなのははまだ九歳の女の子。連日の魔法の行使によって疲れが目に見えて現れていた。
そんな彼女を氣遣った家族や友人によって今日明日は搜索を中断、休息に回そう、と決定したのだが。

「で、お前らは私にナニをして欲しい？」

いささか卑猥なニュアンスをこめて転がる三人へと尋ねる。

唯一なんとなく意味を深取りし、赤くなるすすかを不思議に思いながらなのはとアリサは答えた。

「ええと、明日なのはのお父さんがオーナー権コーチをしてる男子のサッカーチームの試合があるんです。

それでその応援に私達が行く事になったんですけど……」

少し言い辛そうに口を噤むアリサ。

そんな彼女を見てアーカードはピーンと何かを察した。

ニヤア、と怪しい笑みを浮かべ三人の真意を代弁するアーカード。

「ほほう。私にもその応援に加わって欲しいと？ 眉目麗しきこの私に？」

そういうことなのだろう。

最屑目でなくとも床を転がる三人は美少女にカテコライズされる可愛さを持つ。

だが自覚は無いのだろう。そこで彼女たちは、試合に参加する男子達のために最近知り合った超が付くほどの美少女、アーカードへと協力を申し出たのだ。

ちなみにアーカードは自分が美少女である事を自覚しているし当然とも思っている。だからなに？　といった感じだ。

「少年が己が腕――この場合は足か――を振るい汗を流す闘争となるほど私が赴く価値もあろうもの」

意外だ。ノリ気であるこの吸血鬼。

以前にも記した事だが最近のアーカードは人間への愛が増している状態にある。

海鳴に来てから闘争、平和の両極端ではあるがどちらの環境でも人間の新たな可能性を見出し始めているアーカード。

機嫌が良い彼女としてはこのような児戯に興ずるのも悪くはないと感じているらしい。

球技の応援に極上の吸血鬼が赴く……百年前には考えられない事態である。

「じゃ、じゃあ？」

「ふむ、よろしい。明日は私も戦場に参ずるとしよう」

そう言って部屋を後にするアーカード。

アーカードはここ数日着っぱなしの白いコートに目立つ汚れが少し気になっていたのだ。

もう一度言うがアーカードは美少女である。それとこの時期にコート、という事も相まって彼女は海鳴でちょっとした有名人になっていた。

目立つ事を余り好まない彼女はそろそろ服を新調すべきか、とも考えていたのだ。

アーカードにとって服とはその姿を変える時に付随する身体の一部。着替えなど本来必要ではないのだが、ここ数日の人間味を帯びた生活で考えが少し変わってきているらしい。

主が消えた部屋。

カーカーとカラスの鳴き声が空しく無情に響く。
そして未だ床に転がる少女達。

「よかったー。アーカードさん来てくれるって」

「うん。闘争……では無いけど、男子の子達もこれでやる気であるよね！」

ウネウネ。

すずかの安堵に同意するなのは。

「ちょっとー！ 解きなさいよコレー！ アンタ達も何をシレっと会話してるのよ！ だ、誰か助けてー?!」

ドッタンバツタン！

その慟哭は月村家のメイドであるファリンとノエルが駆けつけてくれるまで止まなかったという。

「アーカードさんがいらっしやるとは……」

「日本の蹴球、アソシエーション式フットボールに興味があつてな」

「サッカーと普通に言ってください」

日曜日。

お昼時に相応しいさんさんとした日光が河川敷のグラウンドを照らす。

高町士郎は、自分の監督するチームの試合の応援に駆けつけた娘とその友人二人をベンチに案内した。

するとグラウンドへ繋がる道の先から白いワンピースを着て白い日傘を差してこちらに歩いてくる美少女を見つける。

ほう、とその可憐な容姿に嘆息した士郎であったが、なんとその少女は知り合いだったのだ。

応援に来てくれたアーカード曰く、なのは達に誘われたのこと。

それはどうも、彼らも喜びます、と教え子達の方を見る士郎。

男子達も、今海鳴で噂の”白の美少女”ことアーカード嬢の登場に色めき騒立ち、一層のやる気を見せていた。

なるほど、アーカードはその場にいるだけで周囲に影響を与えてしまいうらしい。

別に魅了の魔眼を使っているわけでもないのに、だ。

「わ、アーカードさん素敵」

「ふふん、当然だ」

なのはが自分の隣に腰を下ろすアーカードに素直な感想を述べた。白いワンピースは半袖。しかし露出すべき腕は白いロンググローブで覆われており、全身が白一色となっている。

しかし背後になびく黒髪と相まって、落ち着いた品のあるモノトーン調になっていた。

手提げ鞆を地面に下ろすアーカードに声を掛ける少女が一人。

「あ、それお姉ちゃんの服ですか？」

すずかはアーカードの着る服に見覚えがあるようだ。

「うむ、お下がりがらしい。居候の身であるがゆえな、おいそれと新品を所望することなぞ出来んよ」

とは言う物の、最初は衣装カタログを片手に忍へと迫ったアーカードであった。

とりあえず見てみってくれ、と忍がかつて着ていた洋服の数々を見せられ、この服が目に残ったアーカードは即決したのである。

JFCの男子達、はては試合の相手側の男子達までもがチラチラとアーカードへと視線を寄越す。

それも当然よな、とケラケラ笑うアーカード。アリサはそんな彼女を見てため息をついてしまう。

「私も貴女位に自信に溢れる事が出来ればいいな、なんて思うわ」

こうしてギャラリーに良い所を見せようと、敵味方全ての男子がい

つも以上の熱気を纏い、試合が始まった。



「ほう、中々どうしてやるではないか」

ニヤ、と笑みを浮かべ荒れ狂う少年たちの闘争の場を眺めながらアーカードが満悦そうに感想を述べる。

「お、おかしいな……。おい！ もう少しスポーツ精神に則って――」

士郎の指示もとい咆哮は少年たちの耳に届かず。

彼らはこれまでにない程に全力を持ってボールを追う、相手選手をどつく、ギラギラと勝利を求める。

少年たちは鬼気迫る勢いで試合に臨んでいた。

「ハハハ！ 人間の赴きも中々に心躍るではないか！ オリンポスの神々の競いを見ているかのようだ！」

「いやいや！」

ご機嫌なアーカードに士郎がつっこむ。

幸いにも魅了^{チャーム}は発していないようで、単にギャラリィ、アーカードに良い所を見せようと頑張っているだけだ。

まあそれも少し行き過ぎている感は否めないが。

ハラハラ、と。

そんな試合を見つめる少女達。いつも以上に元氣すきん少年達の熱気に当てられてしまっているようだ。

確かにアーカードの応援(?)は効果抜群だったようだ。

怪我を恐れず我武者羅に勝利を求める少年達の姿は恐ろしくもどこか気高く見えた……かもしれない。

そんな中。

なのははとある一点を見る。

そこには毅然として、襲い来る豪速のボールを受け止めんとするキーパーの少年。

?

その少年から漠然とだが非日常的なナニカを感じる。

「……気のせい、だよね」

なのはは頭を軽く振り雑念を捨てる。

両隣で歓声を上げる友人と一緒に、頑張りを見せる少年達にエールを送る作業に戻った。

そんななのは、果ては士郎を見やる白い少女がいた。

・
・
・

試合終了。

からくも勝利を手にした海鳴JFCのメンバー。

小さい傷を多々こさえた少年達は、頭を抱える士郎と腕を組み満足そうに微笑むアーカードの前に整列していた。

「良くやったぞ小僧共！ 夕食ゆうげを兼ねた祝賀をこれより喫茶翠屋で行う！

我こそは此度の戦の功労者と自負する者は私に続け！ 凱旋である！

「「「オオオオ！！！！」」」

白い少女の一声に一齐に反応、咆哮して答える少年兵。

これがサッカーの試合の後だとはこの光景を今見る人々は想像できないだろう。

なんとも圧倒的な光景に啞然としながら苦笑するのは達はアーカード達の後に続き

「……俺よりアーカードさんの方が監督に向いてるんじゃないか……」

一人しょんぼりする中年がトボトボと歩を進めた。



翠屋にて物凄い勢いで食事を頼張る少年達に店長の桃子は首をかしげる。

「元気があるのは良い事だけど……どうしたのかしら」

まるで兵隊さんのよう、と彼女は漠然と考える。

「今日は皆、頑張ったからな……腹も減るだろうさ……」

「し、士郎さん？」

俯きながらビールを煽る夫を心配する桃子であった。

「アーカードさんはスポーツとかしてたんですか？」

少女四人でテーブルを囲い、パフェを食べる。

少年達はアーカードよりも腹を満たす方に気が向いているらしい。

先の試合ではこれまでにない運動量を経験したのだ。

花より団子、腹が減るのも無理はない。

落ち着いた空気が女子が集うこのテーブルにはあった。

「うーむ。体は動かしていたが……誰かとルールを決めた勝負事などついぞした試しがないな」

ホムホムとパフェを頬張るアーカードはアリサの質問に答える。

その姿はどこからどう見ても甘い物を食べて幸せになっている少女そのものだ。

「そうさな。乗馬の真似事ならやっていたぞ」

生前、人間であった頃、それも戦場での話だ。

「あ、私も乗馬の習い事やってますよ」

「ほう、月村の令嬢は剣と槍を持ち戦場を駆けるものなのか？」

「い、いや。普通に紳士淑女の嗜みとして、です」

淑女……馬に跨りグールをなぎ倒すインテグラを想像し噴出すアーカード。

なのは達はそんな彼女を見て首を傾げてしまった。

「まあ目的は違えど動物と心を通わす事は悪い事ではない」

その言葉にアーカード以外の少女の視線がへとユーノへと移る。
キュッ！？ とクツキーの欠片を食べていたユーノは突然自分に向
けられた視線に驚く。

「そういえばユーノって普通のフェレットとちよつと違うわよね」

アリサがヒョイ、とユーノを掴み抱く。

「あはは、コイツ照れてるー」

その小さな顔を赤くしたユーノをもみくちゃと撫でるアリサ。
隣に座るすずかもそれに続き優しく微笑みながら参加する。

なのはも若干焦りながらその光景を見て笑う。

が、アーカードだけはニヤニヤと怪しく笑っていた。

「気をつけろよ？ なんせソイツも雄だからな。巷ではそのナリも
あってか淫獣とまで囁かれているそうだぞ？」

「あ、アーカードさん！？」

なのはとユーノのツツコミが響く。

「え、今……」

喋らなかった？ とユーノを持ち上げ首を傾げるアリサ。

しまった！ ユーノはキュッキュキュー、と暴れながら誤魔化す。

両腋を持たれ持ち上げられているユーノ、そしてアリサを見て

「獣とはいえ、裸の男子おのこの股間をじっくり見るには時期早々だぞアリサ嬢」

アーカードはニヤけながら忠告した。

「なっ！？ そ、そんなつもりじゃないです！」

「ハハハハ！」

どうやらアリサ・バニングスはアーカードに気に入られたようだ。すっかり玩具扱いである。

甲板に穴を開けた張本人に助け舟を出されたユーノはジト、と楽しそうに笑うアーカードを睨む事しかできなかった。



思った以上に余興を楽しむ事が出来たアーカードはご満悦だった。

祝勝会もお開きと相成り、各々が帰宅の途に着く。

アリサとすずかはこれから用事があるから、となのはとアーカードに別れを告げる。

士郎と桃子にご馳走様でした、と頭を下げ二人は迎えの車に乗り込んだ。

それを見送るなのはとアーカード。

月村邸に帰るのならご一緒にどうですか、と送迎車の運転手、バニングス家の執事である鮫島の提案をアーカードは断った。

「結構。私はなのはと話がある故」

「左様でございますか。では帰宅の際は月村様の家かバニングス家にご一報を」

恭しく頭を下げる鮫島にアーカードは ふむ、と頷く。

「客人とは言え他人である私に向けるその好意と主に仕える姿勢。中々に好ましい。お前は良い執事だな」

「勿体無いお言葉でございます」

「その在り方、努々損なうな」

「……はっ」

老年の鮫島であるが、目の前の少女からは貫禄と気品が、己が使える当主すら上回る物を感じる。

ゆえにその賛辞と激励を素直に受け取り鮫島は翠屋を後にした。

「……」

その後姿を見送るアーカード。

何か思うところがあるのだろうか。

先ほどまでの浮かべていた笑みは薄くなり、眉を下げる事で自嘲じみた笑い顔を作っている。

普段何を考えているのか分からないアーカードであるが、今の彼女からは分かりやすい感情がなのはにも見ることが出来た。

――後悔？

なのはは首を傾げる。

「……何、昔の知り合いに執事がいただけのことよ」

隣で自分の感情に当てられたのか少し悲しそうな顔をするなのはに気付くと、アーカードはその頭をくしゃりと撫で喫茶店へと戻る。

撫でられた頭に手をやり、その後をトタトタと急ぎ足で行くなのは。

そうだ、アーカードさんは話がある、て言ってた。

きつとジュエルシードの事じゃないか。

なのははアーカードが浮かべた不思議な感情を忘れるように努め、喫茶店へと戻った。

街は危険で一杯だ (中編) (前書き)

次回は今夜(11/21 深夜)に更新します。

街は危険で一杯だ（中編）

祝勝会というどんちゃん騒ぎも終わり、高町家による掃除が一段落ついた頃。

アーカードとなのはにユーノ、士郎と恭也は既にclosedの看板を下ろした店内の奥のテーブルを囲んでいた。

未だ和やかな空気が漂う中、真面目な顔のアーカードが一同に話しかけた。

「で、だ。この中で気付いた者はいるか？」

突然のアーカードの質問に一同が首を傾げる。

「……まさか全員とはな……」

おいそこの御神の剣士。貴様らは魔力を感じる事が出来ずとも非日常の気配くらい感じ取れるのではないか？」

少女の睨みに硬直する士郎と恭也。

かすかに怒気を含んだ少女の視線が二人を穿つ。

「はぁ、所詮は田舎剣法か」

ため息交じりに発せられたその言葉を聞いて男性二人がムツと不満顔を作ったその時だ。

「あ、あの。もしかしてジュエルシードですか？」

なのはが恐る恐る挙手をしながら隣で腕を組むアーカードに告げる。

「ほう、まさかお前が気付くとは」

意外だな、と少し目を丸くするアーカード。

「試合の終わった時に少しだけですけど……気のせいだと思ってました……」

「本当かなのは！」

「う、うん。キーパーの男の子だったと思うの」

アーカードとなのは以外の者が席を立ち驚く。
それを見たアーカードは再びため息を吐いてしまう。

「幼子のなのはが気付いて貴様ら大人が気付かぬとはな。田舎どころか揺り籠すら出ておらんではないか。平和ボケのしすぎだ小僧共」

ビシャ、と容赦の無い批判が士郎と恭也に突き刺さる。

それに反応した恭也が立ち上がろうとするが

「貴様もだ動物。お前は我々よりも魔法に長く触れて来たのだろう。しかもジュエルシードの発掘者は貴様だろうが。気配すら感じぬとは何のため我らに同行している」

ユーノにも情けの無い罵倒の言葉を放つアーカード。

「申し訳ありません……以後気をつけます」

頭を下げるユーノを見てアーカードは続けた。

「反省するならばいい。お前はまだ幼いからな。」

……だがなそこのお子様剣士共、貴様らは話が別だ」

——ジャゴツ

目にも留まらぬ速度でハンドバッグから引き抜いた、454カスー
ルを恭也の眉間に突きつけるアーカード。

反応できたのは士郎だけ。彼は手刀でその巨銃を弾く動作に入りか
けていた。

「……ア、アーカードさん……」

濃厚な殺気を銃口から突きつけられている恭也。

御神の剣士でさえ経験したことの無いような代物だ。かろうじて指
を動かす事が出来る程度だった。

しかし何かのアクションを起こすだけでトリガーを引き、頭を吹き
飛ばすであろうアーカードの視線に恭也は動く事が出来ない。

なのはとユーノは絶句し、士郎だけがなんとか場を治めようとアー
カードを睨む。

「……アーカードさん。おふざけは止めて下さい」

「これを、鉄火を以って息子を挟らんとする私の所業を戯れだど？
これほど分かりやすい害意を戯れと言うのか貴様は。成程、故に貴
様は無色の害意を気取る事が出来なかったのか」

未だ銃を下ろさないアーカードとその手刀を静かに少女の腕を切り
落とさんと揺らす士郎。

どうしてこんなことに、となのはは涙目になってしまう。

「ユーノのように己を恥じ足を進めんと改心するならば良し。なのはのように稚拙ながら戦場の匂いを嗅ぐのもそれも良し。だが貴様らは何だ？ 私の罵倒にただ怒り、抗議せんと立つだけか？」

「で、ですが私達にも日常があります、それを守るために日々の努力もしています！」

そんな日常で敵意の無い物を探れというのは恭也には酷な話だ！」

息子を庇う士郎の台詞にアーカードの纏う殺意が膨れ上がっていく。それは翠屋の厨房にまで達し、桃子と美由紀が感づきアーカード達を見て息を吞む。

「恭也、貴様は私に言ったな？ 『俺には守りたい人達がいる。そのためならば世界をも敵に回してやる』と。」

私の心の臓をそれなりに穿った大層な言葉であったが、それは嘘か。身近な敵を感じせずして何と戦うつもりか間抜け」

撃鉄を起こす。あとはその細く美しい指を曲げるだけで恭也の頭が爆散するだろう。

「世界を敵に回す壮絶さを知らぬゆえの無知。それはまあいい。

だが此度の戦場は常、貴様らの周囲にあるものと知れ。

敵意の有る無しなど戦劇を知らぬ客席の凡夫の思考だ。闘争の本質を見失うな剣士共」

それが彼女が平和ボケ、と言った意味であった。

今回の件をどこか遠巻きに感じていた士郎と恭也。

なのはすら気付けたジュエルシード、無色の害意を感じる事が出来

なくて何が御神の剣士か。

それを自覚しうな垂れる士郎と恭也。

その姿を見て黙って頷き銃を下ろすアーカード。

「忘れるな。無色であろうと無意味、無意義無価値無害であろうと。敵は来る。彼らは来る。殺し殺され、打ち倒し打ち倒され、朽ち果てさせ朽ち果てるため。

神も悪魔も、お前らでさえもその理を違えることなど出来ない。ならば殉じろ、剣を持ち銃を以って」

何も言えない三人と一匹を眺めると彼女は頭を掻いた。

「……ふん、まさか私が説法の真似事をするとはな。このような事はどこぞの神父の仕事だろうに」

”アイツ”ももう、生きてはいないか、とアーカードは席を立つ。

「ア、アーカードさん、お父さんとお兄ちゃんは悪くないの。私がもっとちゃんと気を配っていれば……」

アーカードを引きとめ涙目で見上げるなのは。

そんな少女を見てアーカードは

「阿呆う。今回はあやつ等の不手際だ。お前の感性にはむしろ驚かされた。その調子で頼むぞ」

グリグリとなのはを撫でるが、なのはが笑顔に戻る事は無かった。

翠屋の空気は先程の穏やかな物から重く険しい物と変わってしまった。

だがその原因はアーカードの物だけとも言えない。しばしの沈黙の後、それを破ったのは御神の剣士だった。

「その通りだアーカードさん。俺は大切な人を守るんだ」

恭也が立ち上がる。

「……すまなかったな皆。どうも対岸の火事と侮っていた俺がいたみたいだ」

士郎が静かに告げる。

高町の人間はアーカードが思っている以上に強い魂を持つようだ。それを見て、以前敵対していた時よりも彼らの評価を上げるアーカード。

——人間という物に感化されすぎたか？

士郎達を見て素直な笑みがこぼれた事でアーカードはそう思ったしまった。

「やはり人間とは素晴らしいな。前へ先へと足を進める事に躊躇がない。……そうさ、羨ましいよお前達が」

翠屋の扉を開くアーカード。

それと同時。

夕焼け差し込むオフィス外から閃光と巨大な爆音が轟いた。

「そら見ろ。狼煙だ、戦火だ。色を持たない敵が、かくあれと生きようとする敵が私を待っている」

どうやら件のジュエルシールドが発動したらしい。

しかしここに先の重い空気は既に無い。各々が新たな決意の元、臨戦体制を取り始める。

だが。

それを一人の少女が止めた。

その少女を血の色の闇が包み、瞬間霧散する。

白いコート、白い帽子。黒く長い美しい髪をなびかせた少女は、指揮者のように両腕を肩の高さまで掲げ眼前の人間達に告げた。

「下がれ人間」

人間達に似合わぬ説法をバケモノ（ワタシ）が説いたのだ。
ならば教授の手本を見せてやらぬわけにもいくまい。

「――教育してやろう、本当の闘争というモノを――」

街は危険で一杯だ (中編) (後書き)

登場人物が和んだら奈落へ突き落とす！

それがHELLSING！それがアーカードさん！

次回、旦那無双。

街は危険で一杯だ (後編)

街を蹂躪する巨大な樹木。それにより形成された一つの樹海。

それを生んだのは人間の意志だ。

ジュエルシードは強い想いを持った人間が願いを込めてこそ一番の力を発揮する。

海鳴の一角に展開された樹海。

それは一人の少年と一人の少女の恋慕が成就せんと願い、焦がれた事による永遠の育みの具現であった。

これまで発動、暴走したジュエルシードはそのほとんどが無機物、もしくは動植物の意思を汲んだ物。

なるほど、今回の暴走の規模を見るに、やはり人の意思はそれらと比べ物に成らないほどの強さを持つようだ。

巨大樹による樹海。

そこには害意などは無い。

ただそこに、あるべくしてありたいと願ったたった一つの生存本能。来る敵には迎撃を。襲い掛かる脅威には更なる脅威を。

大よそ生物らしい在り方を体現した一つの世界である。

「笛を鳴らせ。ここに戦の狼煙を上げろ」

だが生まれたばかりの世界は知らない。

ここには、この海鳴には

更なる上位に君臨する

暴虐なる王の治世が敷かれた一つの国家が存在する事を。



ユーノが封絶結界を展開する。

魔法の素質を持たない者を強制的に指定範囲から除外する高度な封印式結界の一つだ。

この年、若干九才でそれを可能とする彼もまた、なのはと違った天才と呼ばれる存在なのだろう。

士郎と恭也はただ見るだけ。

今、眼前の先で展開されている出来事に、戦闘に、闘争に、入り込む余地がないから。

しかし彼らとて一級の剣士。相手が人ならば多数に無勢でも制圧なぞお手の物である。

そう、敵が人の形をとっているならば。

それと戦う味方もあるならば。

なのはレイジングハートの柄を握り締める。

先程言ったように、今回のジュエルシードの発動は防げたのではないかと後悔しながら。

しかしその想いは今や薄まっている。

魔法、という神秘に触れることで非日常な生活を手に入れた彼女でさえ、

目の前で繰り広げられる超非日常的な光景に圧倒されてしまっているから。

「先の轟音。宣戦布告と受け取った。これで戦争が出来る、また戦争が出来るぞ。戦争だ、お互いの存続繁栄をbetした戦争だ」

上下左右から襲い来る触手、否、丸太と呼ぶに相応しい巨大な幹を搔い潜る白い少女。^{バケモノ}

時たまソレが彼女の四肢を掠る。それだけで小さな少女の肉体は弾け飛ぶ。

鮮血を撒き散らせ、臓物を躍らせ、狂った笑い声を上げながら。

「痛いな、凄く痛いな。良いぞ、糞つたれ、気持ちがいい。蹂躪制圧虐殺塵殺、侵して犯してイっちゃまえ」

両足を失い動きを止めた少女へ幹の一部、巨大樹の本体から生える丸太が振り下ろされる。

その速度は音を置き去りする一歩手前に及ぶ。

この街に出現した一つの世界（暴走体）が、自らを侵略しに訪れた新たな世界（脅威）に言いえぬ恐怖を感じた事でその挙動には一切の容赦が無い。

容赦などという慢心を許せば『飲まれる』と感じたからだ。

「太いなあ。太すぎて私の子宮には納まんよ、ソレ」

四肢を碎かれ、地面に転がる少女は笑う。

巨木の影に包まれ、暗がりの中で笑う小さな少女はそのまま、巨大な暴力によって叩き潰された。

グツチャア！ と水音が何十にも重なった不快な空気の振動が周囲を襲う。

地面は碎かれ亀裂が走り、飛び散った破片が街を走る。

ユーノが目をそらし、なのはが絶叫を上げる。

しかし、士郎と恭也は知っている。知らされてしまっている。

あの少女、化物、吸血鬼、アーカードの恐ろしさを。

だから彼らは目を逸らさない、耳を塞がない声を上げない。

「next please. 一回イっただけか。朝のコーヒーを飲むには早すぎる」

グチャグチャ、ミンチにされた”事故”現場に溜まる赤黒いナニカが蠢き始める。

言葉を発する器官と思しき物が動く。それは更なる刺激を要求してきた。

士郎と恭也は予想していたものの、改めてその光景に息を呑む。
アレが吸血鬼という物。夜の一族の始祖にして、純粹で凄惨で滑稽な、人類の敵。

「では私の手番だな。」

——拘束制御術式第3号・第2号、開放。状況B「クロムウエル」
発動による承認認識。目前環境の完全制圧までの間、能力使用。限定使用開始——」

——ザアアアア

肉片を囲む血の海が津波のように広がっていく。

不思議な光景だ。本来津波というのは一方から一方へと流れる片道通行。

それなのに、アーカードから発生したソレは街を、道を、車を、街灯を、ビルを進んでいく。

そう、それは津波ではなく侵略なのだ。他国の領土を蹂躪する一片の狂いも無い征服なのだ。

『————』

自分の世界を揺るがす脅威に更なる抵抗を開始する暴走体。
その本体であり、抱き合う形で眠る少年と少女、王と王妃を頑丈な
蔦と幹が包んでいく。

最早コレと言った標的を狙わず、荒れ狂うように枝を振るう暴走体。ユーノの結界によりこの戦場に一般人が残っていないのが幸いか。自分に付着した蟲を払うかのように、暴れる巨大樹によって街が廃墟と化していく。

周囲を走り、暴走体の木々の根元に達するアーカードの一部達。少しずつ、少しずつ、泥沼に沈む獣のように木々は血の海へと沈んでいく。

未だその実体を現さないアーカード。本体と呼べる彼女は未だどこにも見られない。

しかしそれは違う。今、この戦場を走っている血の海こそがアーカードなのだ。

半径数百メートルに及ぶ液体こそが、その吸血鬼なのだ。

「ミィつけた」

いつの間にか、王と王妃の眠る宮殿に付着していた拳程の血糊。グパア、とそこには白い目玉が現れた。

一つの目玉が二つに。二つの目玉が四つに。四つが八つ、八つが16個。

血糊の付着部分と共に倍々に増えていく人外の視線。

どの視線もが語るのは一つの真実。

展開された血の海が暴走体の分体とも言える木々を飲み込みつつある現状。

その中で一つ、侵略が遅く、唯一抵抗を見せる巨大樹を感じたアーカード。

そこに視線を移して見れば、今回のジュエルシードの発動のきっかけとなった少年と少女を見つける事に成功した。

「Hello , again」

ギユパア、と再び実体を見せた白い少女。彼女が立つのは王と王妃の御前である。

主の危機を感じた巨大樹の多数の枝が彼女に襲い掛かる。

しかしアーカードはその事ごとくを高速で振るう腕で掴み取り、

「一つ教えてやろう。吸血鬼の最も恐るべき物はなんだと思う？」

なのは達には聞こえない小さな声で呟く。

アーカードは目の前の眠る少年少女に語りかけているのだ。

答えるすべを持たない巨大樹は続けてその腕を振るう。

しかしアーカードは先と同じようにそれを再び掴み取っていく。

「特殊能力、吸血能力、変身能力、その不死性または高い耐久力……etc etc」

我らを吸血鬼たらしめる要素は確かに多い」

——ギチィ

枝を握る手に力が籠る。掴まれた枝の全てに亀裂が入っていく。

「もっともっと、もっともっと単純な事なのさ」

迎撃する事は不可能、とその単純な思考で眼前の敵への対抗策を再考した暴走体は主の眠る空間を枝と幹で覆い隠す。

そう、暴走体は防衛・籠城へと移ったのだ。

「——我々吸血鬼はな、とおっても力持ちなんだよ」

アーカードは枝を握る両腕をそのまま自分を阻む幹、城門へと突き穿つ。

表面を削り、抉るその腕の持ち主はさも楽しそうに笑う。

一瞬の静寂。

侵略をされた暴走体は恐怖と後悔で。

侵略をした吸血鬼は蹂躪と闘争の快感で。

その沈黙を破ったのは、侵略者であるアーカードが思い切り両腕を振るった事による、防壁の崩壊を意味する轟音だった。

こうして最後の砦である幹の間を破られた暴走体はその挙動の一切を止めた。

「——open sesame——」

最後に暴走体が持たぬ目で見た物、それは可憐な少女が浮かべる事叶わぬ、凄まじいまでに恐ろしい笑みだった。

束の間の二人だけの世界を構築した少年と少女は、こうして侵略者の腹に収められる事と成った。

「これが方法^{ルール}。敵を討ち滅ぼし敵を撃ち殺し、敵を愛する素敵で単純な至って普通の戦争だ。

これが闘争^{プレイ}。一切合切命の無い誇りも無い、馬鹿げた滑稽な戦争だ。残るは勝者と弾痕、薬莢のみ。

見たか聞いたか感じたか小僧共。お前らが挑み臨むモノとはこれほどまでに肉肉憎憎しい血の掛け合いだ。

救われぬ物に刀剣を。スクわれぬ者には拳銃を。戦かくあれ、糞くらえな神よ語慈悲を寄越せ——A m e n」

崩れ落ち、血の海へと沈み行く木々、倒壊していく建造物と轟音を背景に、

ビルの屋上に立つアーカードは眼科に見下ろす人間に、これで教育は仕舞いだ、と告げた。



『先日夜半に起きた海鳴市オフィス街における爆発テロ事件の情報が入ってきました。』

混乱の続く海鳴商事ビルの前から佐藤記者がお送りします』

『こちら海鳴商事ビル前。関係機関では戦後の復興さながらの様子を見せています。

多くの建物の崩壊、周辺地域施設の破壊の爪跡。しかし確認された死傷及び負傷者は今のところ0名。

主犯はおろか、犠牲者や目撃者すらも現在はどうとしてその行方が掴めておりません』

――ブツ

月村の家のリビングに設置された豪華で大きなテレビから流されていたニュース報道が消される。

リモコンでそれを行ったのは月村忍。現月村家の当主である。

「……貴女の仕業ですね」

少し離れたところ、窓際から太陽を見上げながら血を仰ぐ少女を睨む忍。

「そうだ、私の仕業だ」

アーカードは輸血パックを飲み干し、傍に控えるノエルへと投げ渡す。

付着した血に眉を顰めながらもそれを受け取り、ゴミ箱へと移すメイド。

「どういことですか。一体何が起ったのですか、何を起こしたのですか」

忍の視線が強くなる。無為視ながらに夜の一族、吸血鬼の一端が現

れてきているようだ。

先日、普通に帰宅してきたアーカード。

彼女から多少の血の匂いを感じた忍であったが事情を聞くには憚れた。

なぜならアーカード本人が壮絶な笑みを浮かべていたからだ。

故にそのままでいた所、朝になって海鳴系列のニュース番組で事の顛末を知ったのだった。

「教育。無知な兵士に我が闘争を、我が世界を垣間見させただけのこと。なに、死人は出なかったのだ。良かったろう？」

その言葉を受けて立ち上がる忍。

「事情の説明をお願いしますアーカードさん。事の次第によってはこの霊地を預かる管理者としてHELSINGへと抗議しないといけません」

「ふむ、よからう。そういう事ならば説明せねばなるまい。ここ、地球を巻き込む次元を超えた騒動をな」

■

「父さん」

「恭也か……なのはとユーノ君の様子はとうだった？」

「……参ってるみたいだ。犠牲者は出なかったものの、あんな光景を見せられたんだ。彼らの年齢を考えれば当然だろうな」

高町家のリビングで顔を合わせた士郎と恭也。

アーカードによる六つ目のジュエルシードの確保に成功した今回の騒動。

発端となった少年と少女は彼女によって体外へと吐き出され、ぐさま病院へと搬送された。

また、ユーノの機転による封絶結界によって唯一人も犠牲者を出す事がなかったのは重畳だった。

「懸念通りだったか」

士郎が眉間を押さえる。

先日、アーカードの協力を取り付けた夜に呟いた言葉を思い出しているようだ。

「どうする父さん。やっぱりなのはとユーノ君は今回の件から外すべきじゃないか。管理局が来るまでは俺達で事にあたった方がいいと思う」

恭也が言う事は最もだ。

なのはとユーノは幼い。その協力を認めたものの、今回の一軒がその危険性を一層高める事となった。

それはジュエルシードによるものではない。アーカードが作る地獄の余波についてである。

「俺もそう思うさ。だがな、なのはは止まらない。あの子の心はこんな事態を引き起こした自分を許さない、と『勘違い』している。むしろ遠ざけて放っておく方が危険極まりない。あの子は俺達が目

に届く所に置くべきだ」

「……」

そう。今回の一軒の発端となったジュエルシード。

その存在をアーカード以外に感じたなのは、今回の暴走を予め防ぐ事が出来たのではないか、と落ち込んでいた。

それをしなかった事で発生した吸血鬼による地獄。死傷者の数が0とは言え、これが再び人のいる場所で起きないとも限らない。なのはは自分を責めているのだ。

ユーノはそんなのはを慰めている。

家族以外の人間の言葉であるなら多少なりとも彼女の心に届くものがあるだろう。

「そう、だな。分かった、俺はなのはと一緒に行動する」

「頼む。俺も無理が出来ない体だ。娘を、妹を守ってやってくれ」

更なる闘争を望む吸血鬼。味方である彼女から家族を守る事を誓う御神の剣士。

自分に出来る事をやる、それも全力全開で、と決意を新たにする魔導師の少女と少年。

彼らの思惑はこれから先、どんな戦場を駆けるのか。

そして、この戦場に新たに降り立つ運命は何を願い、何を思うのか。それはその母と使い魔ですら知る事は無い。

かつて英国で起こった大戦争。その一旦がここ、日本の海鳴で再び起ころうとしていた。

街は危険で一杯だ (後編) (後書き)

T V 原作 3 話終了です。
次回は再び外伝へ。

そのころHELLSINGとか (外伝) (前書き)

再び外伝。

そのころHELLSINGとか（外伝）

「イ、インテグラ様……もうちょっと真面目に探してくださいよ。私だって疲れるんですよ飽きるんですよ」

「ぬふう。年のせいか力仕事はどうも、な。片目が無い、というのも中々にハンデだぞセラス」

「ぬあ！？ 迫り来るペンウッド卿を投げて斬ってもう一度投げて、あげくに踏み抜いた女性がそんな事言います？！」

イギリス、王立国教騎士団HELLSING本部の薄暗い地下倉庫。

「お前は夜目が利くだろう。そら、頑張れ気張れファイトだ婦警。私に樂をさせろお茶を汲んで来い肩を揉め」

「マ、マスター！ 早く帰ってきてー！！」

暗い空間になんか和やかっぱい会話が響いていた。



「あ、これじゃないですか？」

セラスが発掘作業に飽きて、倉庫入り口の段差に腰掛けているHELLSING当主へと一つの箱を運んできた。

箱の表面には

『グレアム卿、置き土産にしょーもない物をここに残す。激しい動きに注意。まあ壊れてもいいけど』

と、インテグラの字で長々と記されていた。

「お、それだそれだ。確かに私の字だな」

四辺十センチ程度の黒塗りが施された地味な箱である。
カラコロ、とそれを振りセラスは首を傾げた。

「魔法の杖、と聞いてましたけど随分小さいんですね、これ」

どうやって開けるんでしょ、と箱の両側を捻るセラス。
相当に魔法の道具に興味があるようだ。目がやばい光を放っている。
どれ、貸してみろ、とインテグラから腰を上げ箱を奪い取る。

「？ おい、蓋部分が見当たらんぞ」

「え、マジですか」

管理局とグレアムから受け渡された時にはよく見ずにそのまま倉庫
行きとなった小箱。

インテグラが取り出し火をつけたマッチの明かりに照らされるその
箱は、完全な立方体だった。

箱という物を仕舞い、出し入れする機能がどこにも見当たらないのだ。

「グレアム卿め。本当にしょーもないモンを残しておって……」

ギリギリと齒軋りを立て箱を握り締めるインテグラ。
ミシミシと怪しい音を小箱が立て始めるのを聞いて、セラスが慌ててフォローを始める。

「ほ、ほら！ 魔法の杖が仕舞ってあるんですよ、きっと特別な開け方が必要なんですって」

とは言うものの、セラスは主の手元をもう一度見る。

綺麗に、完璧なまでに四角。コロコロと振れば音が出るから中に何かがあるのは間違いない。

「……壊しちゃいます？」

——ズモモモモモモ——

やっちゃいます？ と変てこな効果音を発しながら、その左手に異様な赤さを帯びさせ始めるセラス。

「よさんか馬鹿者。異世界異文化異文明の代物だぞ。強硬手段に出るのであれば私に被害が出ない場所でやれ」

「あれ?! 被害がでる類の物なんですかこれ?! ていうか私の安全について何の考慮も無い!」

もうやだこの職場! とセラスが崩れ落ちて咽び泣く。

不憫な下僕を無視して、はてどうしたものか、とインテグラは腕を組んで考える。

セラスにはああ言ったが、大げさではない。

開け方の分からない未知の技術が内包された箱に対して強硬手段に移れるものか。

「うーむ。仕方あるまい、このまま送るか。爆発なぞした所で死な
んだろアイツも」

哀れアーカード。

主君から身を案じられる要素が何一つ見受ける事が出来なかった。



その頃。時空管理局本局、提督私室。

件の土産を残した男性、元円卓会議のメンバーの一人で現管理局本局の提督の地位についたギル・グレアムは己の使い魔から送られた映像を見て息を呑んだ。

『父様、どうかなさいましたか？』

二匹の使い魔である片方、姉猫が通信回線越しに主人に問う。

グレアムは第97管理外世界、通称”地球”における先の海鳴のオ
フィス街で縦横無尽に闘争を繰り広げる白い少女を見つめていた。

「まさか……」

彼が脳裏に浮かぶのはとある存在。
しかしすぐに頭を振ってそれを否定する。

「いや、だがかの御仁は男性だ。そもそも日本にいるはずは……いやしかし……」

あの展開されている血の海。

使用される事は無かったものの、少女の片手に握られたあまりに質量兵器、少女に不釣り合いな白い巨大な拳銃。

グレアムが円卓会議に参加する前、若かりし頃、HELLSINGに入団した時に聞き及んだ組織の保有していた最高戦力である存在の証ではないだろうか。

実際に会った事はないが、その存在は否応無くその耳に届いていた。

——HELLSINGが誇る極上、最強最悪の吸血鬼——

”あの”ナチ大隊を撃ち滅ぼし、”あの”教会の銃剣を討ち果たし、
”あの”飛行船事件を導き解決した最凶の化物。

グレアムの脳裏をよぎる懐かしき故郷英国の思い出。管理局に入った事で薄まったかつて見た地獄のような光景が思い浮かばれた。

「……アリア、ロッテ。八神はやてに加え、映像にあった少女の監視も頼む。

もしかしたら、彼女は管理局に新たな災いを運ぶ死神かもしれん」

『死神、ですか』

主であり父である口から出た物騒な言葉。

彼がふざけてこのような言葉を出さない事をよく知る二匹の使い魔は素直に頷く事にした。

通信回線が閉じられ、再び静寂を取り戻した部屋。
ギル・グレアムは一人呟いた。

「私が歩む道は次元を超えてなおも地獄であつたか……」

祖国の崩壊。異世界への移住。そして平和とも言いがたいがそれなりの平穏を手に入れた新たな世界で失った部下。

それによる誰も報われない独りよがりな復讐計画。

そして、そこに新たに現れ脅威となりうるであろう一人の少女。

「それでも私は、こんなはずではなかった世界に復讐をしなければならんだ」

そして彼は机に飾られた二つの写真を見る。

一つはかつて死なせてしまった部下と、その家族と写った写真。1
0年くらい前の物だろうか。

写る面々が浮かべる表情は皆笑顔。誰もがこの時は希望を胸にこの世界を生きていたのだろう。

そしてもう一つ。

そこには若い男性と年老いた男性の二人が写った物。こちらは古く、
30年程前の物であることが伺える。

「『ジョナル英国人は老いすらも楽しむ』、とは貴方の言葉でしたね」

そつと古い写真を手に取る。

そこでは微笑みあう二人の男性が手を握り合っていた。
片方の若い男性は、若かりし頃のギル・グレアムその人。

この写真を撮った数日後には、あの飛行船事件が起こったのだ。

そしてもう一人の老年の男性、眼鏡と燕尾服が似合う老紳士。それは件の事件において命を落としたとされる人物だ。

「……私にはそんな余裕も資格ありませんでした。貴方はそんな私を見たらどう思われますかね……ウォルターさん」

自分が父と慕い、戦技の手ほどきを受けた師匠とも呼んだ人物だった。

提督となった身で、復讐という外道な行為をせんとする自分を今彼が見たら何と言うか。

自嘲の笑いを堪えるグレアムへ、写真から30年前と変わらない微笑みを投げる老紳士だった。



「父様の様子、変だったね」

「そりゃそうでしょ。現地民があれだけの魔法を使えた、だなんては私にとっても想定外だったわ」

「でもさ、あの白い子……あ、黒髪の方ね。あれって魔法なのかな。あんなの有り得ないよ? ……潰されてたじゃんあの子」

「稀少技能^{レアスキル}じゃない? 地球出身の魔導師は色々おかしい、て言われてるじゃない」

「それって父様も含んじやうよアリア。あ、そういえば父様が管理局に入局する時にデバイスを現地民に進呈したんだっけか」

「確かそう聞いてるわ。多分それを代々受け継いで持ち歩いてたのがあの子なんじゃないかしら」

「成程、それなら納得。この国の子っぽくなかったもん。進呈したのってインテリジェントタイプだっけ？」

「父様が世話になった人の人格がベースだって聞いている。でも詳しい事は私も知らない。父様、当時の事話すの好きじゃないっぼいし」

二匹の猫が昼下がりの海鳴住宅街を歩く。

二匹の視線の先には車椅子に乗って夕飯の食材らしき荷物を運ぶ一人の少女。



「インテグラ様。わ、私に何の御用向きで？」

「うむ。引いては貴方をお願いがあって来たのですペンウッド卿」

「ま、またですか?! 今度は何を私から耄り徒取ろうと?! もうペンウッド家には銃器航空機、はてはパンすらありませんよ!」

「パンまでもか。それは……うむ、なんというか……申し訳ありま

せんな」

「冗談ですからマジな哀れみはやメテクダサイ！」

デケドンデケドン

「用というのは別段物を寄越せ、というものではありません。輸送をお願いしたく声を掛けさせて頂いたのです」

「輸送、ですか？ 通常の便では無理な類の物で？」

「うむ。関税を通されると困る類の物です」

デケデケデケ

「やっぱりそんな頼みですか……」

「御祖父様なら徒歩で行きます、むしろ飛びます。それはもう音速すら超える速度で。」

来るであろう各国の守護航空隊を千切っては投げ千切っては投げ――最後には食べるでしょう。凄かったですよ往年のペンウッド卿は何を隠そう、ロンドン橋を落としたのも貴方の御祖父様なのです」

「……それも嘘ですね？」

「ほんとうです」

ズズズズズズズズ

「はぁ……で、輸送先はどちらに？」

インテグラが怪しく笑う。年老いてなお、その迫力はHELLSING当主相当である。

「――JAPANです――」

そのころHELLSINGとか (外伝) (後書き)

暗雲（色々な意味で）立ち込める海鳴市藤見町。
どうする吸血鬼。このままだと魔法少女になっちまうぞ！

ライバル？ ただの敵だよ、もう一人の魔法少女だ (前編) (前書き)

アニメ4話開始。

ライバル？ ただの敵だよ、もう一人の魔法少女だ (前編)

時刻は正午。四月の日差しは春から夏に向けて若干の強みを増していた。

人間は勿論、この世界に蔓延する動植物のほとんどがそれを良しとし暖かな日差しに気持ちを緩める。

が、この世界には少数ながら、逆にその日光を苦手もしくは嫌うモノが存在する。

「……ち、海辺だと余計に日光を強く感じるよ。糞ったれ、泳ぎたくなるわね」

日傘をさす、白いワンピース姿の少女。

月村忍のお下がりの服を着ているのは、ご存知吸血鬼のアーカードである。

吸血鬼の中でも極上の位置にランクする彼女は日光が嫌いである。大嫌いなのである。

そんな彼女が日光の下を歩くのには理由がある。

周囲に響くローター音や航空機の排出するスモッグに顔を顰めるアーカード。

人一倍感覚が優れる吸血鬼である彼女は、公害に非常に敏感だ。

だが吹き荒れる風で舞い上がるスカートを抑えようとしなのは彼女の本性が雄だからだろうか。

いや、単純に面倒臭がっているだけなのかもしれない。

「わざわざ使いを寄越すか。随分と貴重で厄介な物を積んでいるん

だろうなあ」

滑走路に立つ少女。

意外にもこの光景は絵として映えるものがある。

現在、アーカードは横須賀の米軍基地にいた。

『管理局への協力と介入を許可する。については詳しい指示と武装の追加を送る。2030/04/17 1200に横須賀基地に來い馬鹿』

とは今回の任務（夜の一族討伐）の件を騎士団本部に伝達してから数日経って寄越された返信である。

文の最後が砕けているのはアーカードの主であるインテグラの性分なのだろう。

そう考えていると、彼女の目の前。頭上から一機のヘリが着陸態勢をとり始めるのが見えた。

——アグスタウェストランド AW101

英国海軍が運用する汎用・対潜哨戒ヘリコプターである。

灰色で統一されたその機体は、30名の兵士を輸送可能な大型機。

個人が荷物を運搬するには些か勿体無い代物だが、HELISINGはそれを贅沢に使う事が許された独自の法治組織であるのだ。

着陸した機体から降りてくる人物を見てアーカードは笑みを零した。

「ほう、ペンウッド英国海軍大佐自らお使いとは。またもインテグラが無理難題をふっかつたと見える」

「言わんで下さい……そろそろパシリに抵抗を感じなくなってきた事に、逆に不安を感じるのです」

壮年でありながらゲッソリとやつれた様な風貌のこの男。

かつて円卓会議に名を連ねたシェルビー・M・ペンウッド卿の孫である。

祖父の代から変わらずHELLSINGに搾取され続けている、不憫で哀れな、男の中の男の一族であった。

「お久しぶりですなアーカード卿。日本の空気には慣れましたか？」

「ボケ倒した平和な国だよ。私の性には合わん。

お前も息災のようで何よりだ。騎士団に変わりはないか？」

軽く世間話に興じる二人。

はたから見れば親子ほどの年の差が見られる男性と少女。

少し離れた所でそれを興味を持って見守る駐屯米軍兵達は首を傾げていた。

「ええ。インテグラ様とセラス様のお陰で何も。教会の方から何かとちよっかいが出ていますがお二人が出向くまでも無い些事でございます」

「ふむ。主はともかく婦警すらお役御免とはね。西洋諸国も平和になったものだ」

自嘲めいた笑みを浮かべるアーカード。

平和、それは化物や英雄の物語の終焉を意味するのだ。

この時代に最早我々は必要なにのかもしれない、と少女は笑った。

・
・
・

「これが？」

「左様です。こちらがインテグラ様、王立国教騎士団より預かったアーカード卿の追加武装でございます」

「……箱じゃない」

「……箱でございますね」

男性と少女はヘリから降ろされた拳大ほどの小箱を囲み見下ろす。

どこからどう見ても箱である。

「箱じゃん」

「二度言う必要はありませんよ。私も使用用途については知り得ません。

インテグラ様から預かった書状の方に詳しい事が書かれているはずです。ご覧になれますか？」

「うむ」

カラコロと振れば音を立てる小箱を片手にアーカードは首を捻る。

よく見れば箱の表面から微かに馴染みのある気配を感じた。
何とかこの箱を開けようと挑んだ痕跡、どうやら主と僕もこの箱の
用途について知り得ていないらしい。

「こちらです」

ペンウッドから渡された書類。

そこにはインテグラが記した新たな指令と、今回の追加武装につい
て書かれていた。

「見敵必殺、か。お婆ちゃんも無茶な命令ばかり寄越す」

指令の一部にはこう記されている。

『オーダーワン。サーチアンドデストロイ。ただし、敵とはHEL
SINGの脅威となる物を指す。』

時空管理局なる組織には当初のお前の指針通り、協力体制を敷け』

続いて『追記』と書かれた部分には

『なお、時空管理局にはHEL SINGから引き抜かれたギル・
グレアム卿が在局している。』

件の局とトラブルがあれば存分に名前を出せ。むしろ出して迷惑を
かけろ。引っ掻き回してやれ』

とあり、それを読んだアーカードに笑みが浮かぶ。

「ほう？ グレアムの小僧か。あの執事の教え子であったな確か」

思い出す。

顔を合わせたことはないが、かつてHELLSING家執事が度々その名を出していた事を。

その執事は、自分が倒した事を。

『また、追加武装は、454カスールの法儀済み弾丸を2千、加えてかつて管理局から受け渡された”デバイス”とする。

使用用途についてはこちらも分からず不明。何とかして使え。使わなきゃ管理局に投げろ、全力で』

「……なん……だと……」

アーカードの脳裏に浮かぶのは今回の騒動の発端となった暴走体を”喰った”時の事。

幾多の地獄を経験したアーカードが久しく感じた肉体を超えて精神を蝕んだ新たな地獄。

「アーカード卿」

「……申せ」

「はっ。恐れながら申し上げます。今回の輸送、米軍とのやり取りに随分と無理無茶を通しましたな。

英国から日本への輸送、それは許可を取る事が出来ましたが、逆に日本から英国への物品の持ち出しに関しては許可が下りなかったのです」

「Fuck! それでは私が持っているほかないではないか!」

「わ、私に言わないでくださいよ?!」

少女にFUCK呼ばわりされてうろたえる壮年英国海軍大佐。
いよいよ周囲の米兵達はワケがわからなくなってくる。

本国本部からの通達によれば、今回英軍の大使もしくは物品の搬送
について関与は不可。

それはまさかの大統領命令である。英国とどんなやり取りがあった
のかなど、怖くて聞けない兵士達だった。

「糞が！ インテグラに伝えろ！ この国と異世界に最悪の地獄を
見せてやる、主は座してマスでもかいてろ処女^{バイジン}！、とな！」

「し、死ぬ！ 死んじゃいます私！ 先日インテグラ様にやられた
肋骨がまだ治りきってないのに！ 糖尿病もあるのに！」

「知るかボケ！ 後者については自業自得だ、英国紳士が恥を知ら
んか馬鹿者！」

Oh, this is a ^{シュラーバ}SURABA. YOUJO is
YABEE…….

米兵達は皆一様に呟いたという。



「お姉ちゃん？」

「あ、あらなあにすずか」

場所は移り月村邸。

先日のテロ事件以来、頭を抱える事が多くなった姉に妹のすずかが声をかけた。

「もうアリサちゃんとなのはちゃん、恭也さんがお家に来るよ」

「そ、そう。じゃあお出迎えの準備をしなくちゃね」

椅子から立ち上がる忍。

今日は高町兄妹とすずかの友達のアリサが月村邸に遊びに来る日だった。

恋人の高町恭也が来るのというのに忍の顔は晴れない。

最近、友人のなのはもどこか元気の無い様子だったのを気にしているすずかは姉のそんな姿を見て不安になった。

「……何か悩み事？ 相談に乗るよ？」

「……ふふ、大丈夫よ。恭也と私がいれば何だって大丈夫」

もちろん貴女もいるからね、と妹の頭を撫でる忍。

くすぐったそうに目を閉じ笑う妹を見て、忍は思う。

「（ジュエルシード、か。恭也はまだしも、なのはちゃんも関わってるなんて……アーカードさんったら何してくれちゃってんの本当）」

はあ、と忍はすずかの死角のため息をつく。

「お、お姉ちゃん？」

恭也が来たら問い詰めなきゃいけないわね、と見えない姉の顔に浮かぶ笑顔に危ない気配を感じたすずかだった。



「し、忍？ 忍さん？ 襟じゃなくて首を持つのは女性としてどうかとア痛タタタタ！？」

「はいこっちで”お話”しましうね恭也」

ズルズルと笑顔の忍に引きずられて行く恭也をポカンとした様子で見送るすずか、アリサ、なのはの三人。

月村家メイドのファリンとノエルもそれを啞然と見ていた。

「す、すずかのお姉さんとなのはのお兄さんは相変わらずラブラブだよね……」

「う、うん。確かにお姉ちゃんは恭也さんと知り合ってからよく笑うようになったけど……」

「お兄ちゃんも前より優しくなった……けど……あれってらぶらぶなの？」

月村邸にお誘いを受け遊びに来たアリサとなのはは年長組みのやり取りを見て認識を改めよう、と思ってしまうた。

「そういえば、今日は誘ってくれてありがとうね」

なのはが話題を変えるため、純粹に感謝の意を示すためにすずかに声をかけた。

久しぶりに感じる日常。なには心からの笑顔を浮かべた。

「ううん。こっちこそ来てくれてありがとう」

「今日は元気そうね」

「え？」

すずかとアリサの返答。

「なのはちゃん、最近元気なかったから。……もし心配事があるなら話してくれないかな、て。」

アリサちゃんと二人で話してたんだよけど」

「すずかちゃん……アリサちゃん……」

潤んだ目ですずかとアリサを見るなのは。

すずかは微笑んでおり、アリサはウィンクで答えてくれた。

そういうことだ。

二人はなのはの親友なのだ。

最近、ジュエルシードを探すようになってから連続した魔法の使用により疲労が目立つようになったのは。

更に先日のテロ事件と呼ばれる巨大樹騒動の折に、アーカードによる凄惨な現場を目の当たりにしたなのは。

八、九歳の女子には相当堪える物があるのだろう。

事情を知らないアリサとすずかはそんなのはを心配してこのお茶会に誘ったのだ。

そんな二人の気遣いに潤んだ目から涙を流しそうになるのはだったが

「キュキュキュー?!」

言い忘れていたが。

月村邸には多くの猫、子猫が同居している。すずか達が里親を探しながらその面倒を見ているのだ。

その内の一匹に目をつけられた哀れ小動物ことユーノ。

彼ら(?)の追走劇に涙のシーンはからくも崩壊してしまうのであった。

・ ・ ・

場所は移って月村邸の中庭へ。

ここならユーノも動きやすい、もとい逃げやすいだろう、とファリンのとノエルの提案でお茶の場を移したのだ。

玩具候補となってしまうたユーノと彼を膝の上に抱く(退避させた)なのは

ちょうど猫の話をしている時に、二人は中庭の奥、月村家の敷地である森林から魔力反応を感知した。

「(なのは!)」

「(うん、すぐ近くだ!)」

この時。

なのはの心には二つの決心があった。

一つ。

自分に出来る事を全力全開で。

前回のように後手に回らず、事態を未然に防ぐ事に努める事。

二つ。

とある少女が語り、見せ付けた闘争。

”アンナモノ”に友人や家族、他人を巻き込むわけにはいかない。

自分の望み臨む戦いを、あんなにも恐ろしい物にするつもりはない、
という事。

なのはとユーノはすずかとアリサを誤魔化し、ジュエルシードの気配を感じた森へと駆け込んでいった。

――そして

その場に駆けつけるもう一つの影。

漆黒にはためくマントを身につけた金色の少女が。

ライバル？ ただの敵だよ、もう一人の魔法少女だ (前編) (後書き)

次回、雷の運命少女登場。そしてポツコボコにされる予感。

ライバル？ ただの敵だよ、もう一人の魔法少女だ (中編)

「アーカード卿……逗留地に帰還するのであれば現地の交通機関を使って下さいよお」

「……」

「日本の制空圏内を飛行する許可は取ってないんですよ？ インテグラ様にまた訓練（折檻）されてしまいます……」

「……」

横須賀から海鳴の月村邸へと帰る際に、ついでだ、乗せてけ、と無茶な要求をしたアーカード。

そしてそれを断る事が出来なかったペンウッド卿。哀れである。

そしてAW101へりはようやく海鳴市、月村邸周辺の上空へ差し掛かる。

本国では民間の間でも運用されているこの機であるが、日本を飛ぶには些か目立つ。道いく人が何事だ、と空を見上げていた。

アーカードは喋らない。ペンウッドの苦言すら聞いていない。

彼女は窓からある一点を見つめたまま動く事すらしていないのだ。

未だHELLSINGからの追加武装とやらに不満があるのか、と何も喋らない少女を怪訝に思い覗き込んだペンウッドは

「アーカー——！？」

見てしまった。

かつて祖父が。

ナチスが。

英国が見たであろう、吸血鬼の、彼女本来の存在を示す恐ろしい目を。

「敵だ、敵だぞペンウッド卿。そのままあの屋敷の裏、森の上空にヘリを回せ」

震え、頷く事しか出来ないペンウッドは急ぎ操縦士へと伝達する。

——あれが、あれが祖父が共に戦った化物……！
フリークス



時間は少し遡る。

なのはとユーノがジュエルシード発動の場所である森の中へと入った時だ。

目の前の光景に言葉を失い目を点にするなのはとユーノだった。

「あ、あ、あ、あれは……」

「た、多分。あの猫の『大きくなりたい』っていう願いが正しく叶えられたんじゃないかな、と」

二人が見る、見上げる先には見るも巨大な”子猫”が闊歩していた。可愛らしさと威圧感（？）が同居する光景にあんぐりと口を開けて

立ちすくんでしまった二人だったが
このままでは危険と判断し急ぎ封印をするため動こうとした。

その時

「バルディツシュ。フォトンランサー、連撃」

『Photon Luncer. Full auto fire』

黄金の雷が、巨大化した子猫を襲った。

「魔法の光!?!」

ユーノが雷の発生方向を睨む。本来頭上から地上へと降りるべきソレが空を横切ってきた事には何も思わない。

彼にとってソレは慣れ親しんだ”魔法”と呼ばれる存在であったからだ。

射撃魔法。一目でソレを自分の世界の産物と判断したユーノが見た方向。

そこには黒衣に身を包んだ同世代の少女が電柱の上に立っていた。

長い金髪を頭の両サイドに束ねた少女。

なのはやアーカードとはまた違った美少女と呼ばれる容姿。

しかしその表情は無。何の感情も見せないその少女は再び射撃魔法を巨大子猫へと繰り出し始めた。

「！」

攻撃を再び受けた巨大子猫は悲鳴を上げる。体は大きくなろうとその中身は生まれて間もない子猫なのだ。

痛々しい子猫の叫びにいてもたってもいられなくなったなのはは飛翔、防御魔法を展開し子猫を守る。

「……同系統の魔導師。ロストログアの探索者？」

姿を近くに現した金髪の少女は、子猫の盾となり立ちはだかったなのはを見て呟く。

バリアジャケットを展開したなのはが握るレイジングハートを見て、バルディッシュと同系、とも呟いた。

それを聞いたユーノは確信する。

——この少女もミッドチルダ式の魔導師！

「ジュエルシード、頂いていきます」

なのはとユーノが何かを告げようとしたと同時、間髪入れずに金髪の少女が襲い掛かった。



森の上空に魔力光の衝突による発光が起こる。

「なんで急にこんな?!」

「……答えても、多分意味が無い」

「――それでも、何にも言わずに戦う事にも意味なんかないよ!」

金髪の少女となのはが激突、火花を散らす。

先程より繰り返される攻撃防御。

だが天才とは称されるものの、わずか一週間程度の鍛錬量しか持たないなのは段々と少女に押され始める。

どうやらこの少女は、なのは以上の才能を持ち、鍛錬を積んでいるようだった。

交差するデバイスの光と少女達の魔力光。

桃色と金色のそれは数十度の剣戟を交えと一旦距離を取る。

お互いの持つ技。遠距離砲撃で決着をつける算段のようだ。

なのははレイジングハート越しに金髪の少女の顔を見る。

「...?」

なのはは少女の無表情を作る瞳から何かを感じ取る。

その時だった。

少女の攻撃で気絶していた子猫が目を覚ます。

それに一瞬気をとられたなのはは少女の放った雷撃に反応する事が出来なかった。

「……フォトンランサー」

黄金の雷撃がなのはへ迫る。それが直撃する瞬間、確かになのは聞いた。

「ごめんね」

少女の呟きと

「ごめん、遅れた」

力強い男性の声を。

爆発音。

なのはがいた空を通り過ぎ、背後の地上に生える木々をなぎ倒すフォトンランサー。

ユーノは直撃したであろうなのはの姿を探す。

しかし少女はなのはがいた場所ではなく、正反対である自分の背後の地上を睨んでいた。

「仲間か……」

少女が睨む場所。そこにはなのはを抱えた背の高い黒髪の男性が立っていた。

男性はなのはを地面へと下ろし、頭上の少女へと告げた。

「永全不動八門一派、御神真刀流小太刀二刀術師範代。高町恭也」

呆然とする妹を背に、剣士は腰に下げた小太刀真剣を構え、続ける。

「事情は知らない。だが君は俺の妹に手を上げた。ただで帰れると思うなよ小娘」

先日の街での騒動。

不甲斐ない格好を見せた自分を恥じた御神の剣士。

しかし決心をつけた彼は、今、一人の戦士となっていた。

口上が少しどころの吸血鬼に影響されているのはどうしたものか。



ガングリン、と黄金の光と落ち着いた波紋を浮かべる二刀が高速で交差する。

「（この人、本当に人間！？）」

口に出さず内心で驚愕の言葉を発する少女。

空戦魔導師という文字通り空を戦場にする魔導師である少女。

少女にとって長年訓練を積んだ事により、空戦は既に得意な戦術となっている。

しかし、目の前。そう、空を飛ぶ自分の目の前に現れる男性の姿に驚かざるを得なかった。

「疾ッ！」

恭也の持つ小太刀二刀が高速で少女へ迫る。

空と地上を行き来し幾度とその二刀で襲い掛かる恭也。

その小ぶりの二刀で多数の手数での攻撃を得意戦術とする小太刀二刀術御神流。

それを高速で繰り出された事、慣れない攻撃法によって少女は動きを止めてしまった。

空中で繰り出す剣戟は地上という足場を持たない本来のそれより威力は劣る。

それでも妹程の体躯しか持たない少女を吹き飛ばすには十分な威力は持ち合わせていた。

「ぐっ！」

少女は背面と足裏から噴出す魔力によるブーストで衝撃と飛ばされた距離を殺すが

「捉えたぞ。御神流奥義——”旋雉”——！」

「え……きゃあ!!」

防御を捨て、体制を整える事を選んだ少女の隙を逃がさず、御神の奥義、旋薙を放つ恭也。

居合いによる高速の四連撃。同じ場所を狙った小太刀による四撃はまたも少女を吹き飛ばした。

轟音と土煙を上げ、今度こそ地面へと激突する少女。着地した恭也は少女の墜落した方向を睨む。

「お、お兄ちゃん!」

「なのは、大丈夫か?」

兄に駆け寄るなのは。

「私は大丈夫。で、でもお兄ちゃんやり過ぎだよ!」

「事情は知らない、と言っただろ。なのはも彼女に最初話を聞こうとしたんじゃないのか?」

ヒュン、と小太刀を振るい付着した両者の血液を飛ばす恭也。

彼とて本気で切りかかり命を取りに行ったわけでは無い。

その証拠に彼が持つ小太刀二刀は裏向き、所謂峰打ちの形を取っていた。

「そうだけど……」

確かに恭也の言う通りだ。最初、とは言わず始終少女に言葉をかけていたなのは。

それに反応する事無く、それを無意味と切り捨て刃を振るい続けたのは少女の方だった。

しかしなのは聞いたのだ。自分へと攻撃を放つ瞬間にごめん、と少女が発した言葉を。

「なのは。とりあえず彼女を拘束する。話を聞くのはそれからだ」

「で、でも」

「くどいぞ。彼女にも事情があるのは察しがつく。

しかしだからと言って問答無用で妹に襲い掛かるような輩に――」

容赦などかけん、と言おうとした最中、なのはの視界から恭也が消える。

兄がいた場所には黄金の魔力の残滓が糸を引いていた。

「っ、なんだとっ!？」

「油断した……だけでもうしない」

傷だらけの少女が目にも見えない速度を伴い恭也へと踊りかかったのだ。

少女の持つデバイス、バルディッシュと呼ばれる戦斧がかりうじて防御に成功した恭也の小太刀に食い込む。

伝家の宝刀、とまでは行かないものの名刀には違いない二本の小太刀に黄金の刃が食い込み、罅を入れ始める。

「くっ——」神そ」

「させない」

高速戦闘を仕掛ける少女に対抗して御神の奥義を繰り出そうとした恭也を少女がそうはさせまいと攻める。

恭也が取った過ちは一つ。

敵である少女を魔導師、として認識しなかった事。

魔法を使う魔導師という存在と交戦経験の無い恭也にはそれをしろというのは酷な話だったろう。

少女本来の近接戦闘に関しての才能。それは恭也に及ばずとも妹の美由紀を凌駕する。

そして魔導師としての才能。これも妹のなのはに匹敵するものだ。

近接戦闘と魔法戦闘を同時にこなす少女に少しずつ押され始める恭也。

魔力による後押しも少女の優勢に拍車をかけた。

恭也が”地上を本来の戦場とする事”を見抜いた少女は空中からの射撃魔法による牽制を始めた。

弾幕状に繰り出される少女の攻撃から子猫と妹を守ろうと立ち回る恭也はその全てを避けきる事は出来ない。

「くそっ！」

恭也は舌を打つ。

これが魔導師戦か！ と恭也は今になって異世界の戦士へ愚痴と賞

賛を送る。

「……」

妹を守らんと地上を駆ける御神の剣士を攻撃しながら見る少女。
彼女はその姿を見て一瞬眉を顰めた。

「？」

なのははそれを見逃さない。

自分を守る兄の姿を見て、苦々しそうな顔をした少女を。

・
・
・

「はあ、はあ、はあ」

「……」

お互い傷だらけになりながら睨みあう剣士と魔導師。
しかし確実にこの戦闘の優勢は少女へと傾きつつある。

なのはは先の戦闘のダメージが抜け切れず、ユーノによる治癒魔法
を受けており動けない。

恭也は繰り返される未知の、魔力によるダメージが蓄積し疲労困憊
に。

襲撃者である少女にも少なからずダメージはあるが、二人に比べて
余裕があるようだ。

「邪魔をしないで。私はジュエルシードを集めなくちゃいけない」

少女が口を開く。

「だから！ 事情を聞かせて！ 私達にも手伝える事があるかもしれないでしょ！」

「……最後です。そこを退いて」

ジャキ、とバルディッシュを兄妹に向ける少女。

振り絞って出した言葉を聞いてもらえず口を噛むなのは。

そんな妹を庇うように前に立ち、再び小太刀を構え恭也は言った。

「俺から言わせてもらおう。去れ。次は刃を向ける」

チャキ、と小太刀二刀の向きを変える。峰打ちから刃面、今度は命のやり取りをする、と恭也は言っているのだ。

一触即発。三者三様の面持ちでお互いを睨む。

その時

「よくやった恭也。なのはもユーノもよくぞ耐えた」

心底嬉しそうな声がその場に響いた。

全員が声の発生源、空に浮かぶ少女の更に頭上を見上げる。

聞こえるのは爆音とも言えるローター音。感じるのは大きな風圧。しかしそれを透過通ったかのように、凜とした声が四人には届いた。

彼女達の頭上には巨大な機械。四本の板を回す事で浮力を得、飛行を可能とする地球文明の産物が浮かんでいた。

その機体、AW101ヘリコプターの開かれたハッチから

白い少女が

笑い

人間の言語を発した。

「此度の敵は魔導師か。クハ、異世界の人間の血は赤いのか？　その華奢な体に臓物が入っているのか？

——心の臓は温かいのか？　感じさせてくれ、この私に」

ゾォ、と白い少女の言葉に金色の少女は身の毛が総立った。言っている事の凄惨に対してでは無い。それを発した少女を見て、

だ。

生まれてこの方、感情に乏しかった少女を”恐怖”という物が支配する。

――に、人間にあんな顔を浮かべる事が出来るの？

逆光を背負った白い少女の顔は何えない。

だが、綺麗に並ぶ歯とその中で一際禍々しく光る鋭い犬歯が、彼女が”笑っている”事を認識させた。

それはまるで、人間という種をこれから食そうとする、上位のイキモノのようで。

少女が感じた物は正しい。その白い少女は人間ではないのだ。

なのはが泣きそうな顔になる。

――ああ、来ちゃった。あの人がキテシマッタ！

「征くぞ小娘。死にたくなければ戦斧を振るえ。――私の身内に刃を向けた罪は重い」

ジャゴン、と吸血鬼の鉄火が

異世界の魔導師へ向けられた。

ライバル？ ただの敵だよ、もう一人の魔法少女だ (中編) (後書き)

帰宅が送れ遅めの更新に。

この時点で金髪の女の子は自己紹介してないんですね。
書き難くて仕方がない。

次回、アーカードさんノリノリ！

ライバル？ ただの敵だよ、もう一人の魔法少女だ (後編)

恭也は安堵した。

——自分より圧倒的な戦力を保有するアーカードの加勢に。

なのは安堵し恐怖した。

——この無意味に思える戦いを終えられる事に。

——無意味な戦いがもっと無意味で、血みどろの闘争に変わる事に。

金髪の少女は恐怖した。

——幾度と繰り返す攻撃を一切防御する事なく突撃してくる少女に。

——その度に肉体が弾け、飛び散る血肉に不快感で嘔吐しそうになる。

——非殺傷設定すら通してしまう薄すぎる、否、元々展開していない防御、投げ捨てた命を盾に迫り来る白い少女に！

・ 454カスールの銃口が光る。金色の少女の放つ雷光に劣らない光量が戦場を照らした。

質量兵器と呼ばれる中でも高い威力を誇るアーカードの愛銃。

しかし放たれる弾丸の速度はおおよそ一般的な物と変わらない。

それならば、恭也と互角異常に高速戦闘を繰り返した金髪の少女にとってそれは避けるに難しくは無かった。

銀弾を回避し、白いコートを自らの血で汚すアーカードへと無数の小ぶりの雷槍を放つ少女。

一方のアーカードは回避へ移らない。

体に雷槍と同じ数の穴を空けたアーカードはビグンツと一瞬何かを感じ取ったようで笑った。

「ハッハハハハ！ 何だこれはナンダコレハ！ ”私”に響く！ 数百の命を素通りし”私”に届くコレハナンダ！！」

魔力を運用転換した攻撃によるダメージ。

それはなんと、無数の命のストックを持つアーカードの”本体”へと届いていたのだ。

かつて三百万以上の命を内包していたアーカード。

シュレディンガー（存在確立変動現象）による自己消失を防ぐためにその事ごとくを殺したアーカード。

以前よりも減少したとは言え、未だ一万程の命の盾を持つ吸血鬼へと攻撃が通ったのだ。

魔導師であればこれがリンカーコアと呼ばれる術師が保有する魔力炉心へのダメージと判断するだろう。

（発動している）リンカーコアを持った魔導師を内包しないアーカード。

彼女には魔力ダメージを防御し盾となる命が無かったのだ。

そう、異世界の魔導師の攻撃は、不死性を持つ地球の吸血種に効性を持っていた。

「こ、来ないで！」

少女の雷撃がもう一人の少女を焦がす。

先程まで無表情を作っていた金髪の少女の顔に浮かぶ感情は恐怖。

「断る。貴様に牙が届くまで。ただ前へ、前へ、前へ」

「い、嫌！」

『Arc saber』

主の拒絶を代弁するかのようバルディッシュから金色の光波が放たれる。

それはへりから飛び降り、木々を足場に空を走るアーカードの胴体を上下に分断した。

「ぐウ、ブッ」

「――あっ」

ごぼり、と切断面と可憐な口から血液と臓物が漏れる。

それを見て顔色を蒼白に変える金髪の少女。デバイスを持つ腕が震えだす。

――非殺傷設定を施した攻撃で胴体を分断？ いや、私は人を殺してしまった！

魔法に対して防衛手段を持たないアーカード。更に防御など捨て去った捨て身の彼女には、非殺傷という設定を施した魔法でも容易に命へ届くのだ。

だがアーカードは、己の命に届く攻撃に顔を顰め、笑い、ストックしてある命を消費して欠損した肉体の修復を開始する。

「Oops、糞が漏れちまう」

切断面から漏れた小腸やビチビチと踊り狂う長い大腸を見て、口元を押さえ顔を逸らす金髪の少女。

一般的な食事を取る事が少ない吸血鬼は、体内で形成する老廃物の量が非常に少ない。

これが通常の”人間”であつたならば、地上へと糞尿の雨を降らせていただろう。

「クハハハ、これが純粹な魔力か。なんと重畳、なんと驚愕！　まさか私を殺す手段が異世界にあつたとはな！」

これを大佐が知ったらどうするだろう？

いや、アイツの事だ。

「それはつまらない。つまらないよ吸血鬼^{アーカード}と一蹴するだろう。」

「ひっ！」

ぐちゃりぐちゃり。

分断された上下の肉体が繋がり、苦痛を伴うはずのその姿で、血反吐を吐きながら笑みを浮かべるアーカードに少女の恐怖がいよいよ溢れ出す。

——い、生きてる！　なんで?!　こんなの知らない、聞いてない！

「か、母さん！」

頼るべき自分の母へ助けを求める。
アーカードはそれを聞き逃さない。

「おお、よしよし可愛らしいお嬢さん（レディ）、ママを呼べ。お化けが悪魔が化物が来たぞ！ Trick or Treat！ 命を寄越せ！」

腕を交差させ、454カスールを少女へ向ける。その格好は十字を切るこの世界の宗教使徒の姿に似ていた。

「Amen」

放たれるは法儀済みの銀弾。本来アンチキリストへ向けられるそれは、魔導師の少女の防御魔法に阻まれ砕かれる。しかしその量と迫力に少女は少しずつ距離を空けていく。

「届かぬか。魔法とは意地が悪い。私ばかり”死んで”いては不公平じゃないかな！！」

愚痴を零すが笑みはそのまま。

足場にした木を爆散させる脚力を持って少女の下へ接近するアーカード。

銀弾の弾かれる衝撃と発光で視界を塞がれていた少女の眼前に吸血鬼が現れた。

「ほう、中々に美人ではないか。……少々、腹も減った」

「!?!」

「お前、処女か？」

金髪の少女がお気に召したらしいアーカードはその少女の首筋を見て微笑む。

最近では周知されて来た事だが、笑みとは本来攻撃的な感情表現とも言われている。

それを向けられた少女はついに目頭に涙を浮かべ、動きを止めた。

「あ、あ……」

『Master!!』

「私にお前の命を見せてくれ」

カハア、と開かれたアーカードの口。

そこに覗き見えるのは深遠の闇。真紅の血液。化物への片道切符。

いかん！ と恭也が反応するよりも早く、アーカードの牙が少女の首へかかる。

その直前――

「あゝ、あああ!？」

――アーカードへ天空より紫色の極光が降り注いだ。

「母さん！」

極光の発生源である頭上。紫色の残滓の糸を引き、そこには別の次元へと繋がる証拠である次元の歪みが発生していた。歪みの向こう、おどろおどろしい空間には浮遊する古城のような建造物が伺える。

「――はい、今帰還します！」

その歪みへ急ぎ飛翔する少女。誰かと念話をしていたのだろうか。涙を乗せたその顔には安堵と笑みが浮かんでいた。

「次元干渉?! そんな高度な魔法を?!」

ユーノがそれを見て驚愕する。

世界と世界を隔てる次元空間を跳躍する魔法。Sランクと分類される上級魔導師でも行使が難しい超高度技術魔法である。

こうして姿を消した金色の魔導師の少女。

その後姿を見送ったのは恭也はこれで今回の闘争が終着した事を認識した。

「アーカードさん！」

恭也が駆け出す。遅れてなのはも。

先程の極光が直撃し、落下したアーカード。

ユーノから見てもあの出力の魔力量が直撃すればアーカードと言えども唯では済まない判断していた。

急ぎ彼女の元へ向かう。

しかし、彼らが駆けつけた場所には

「ぐ……」

半身を焦がしてはいるものの、未だ意識を保つ吸血鬼が地に伏していた。

「そ、そんな馬鹿な」

ユーノが驚愕に目を見開く。あの魔法が直撃して”半身が焦げる程度”のダメージしかない？

アーカードの不死性を知らずともその出鱈目っぷりを見てきた彼の目にも、そのダメージの少なさは異常に映った。

「……私はまた生きてしまったのか」

消し炭になった右腕を見るアーカード。

彼女も自身が何故いまだ原型を保っているのかを不思議に思った。

恭也達が駆けつけ、介抱を施す前に肉体の修復を開始するアーカード。彼女は恭也達を制すと元いた場所へ戻れ、と指示を出した。

なのはとユーノの術式で子猫からジュエルシードを摘出、封印。弱った子猫を抱え恭也達は月村邸へと戻る。

ついでに言うペンウッド卿はわけも分からないまま本国へ泣く泣く帰還していったそう。

アーカードは薄く笑いながらも唇を噛んだ。またも死ぬ事が出来なかった、と。

そして彼女の焦げたコートの中では、蓋が開き、むき出しになった小箱から光を放つ黒い宝石が点滅していた。



なのはとユーノ、恭也が月村邸へと戻る。

待っていた友人には小さな嘘を。恋人には事の顛末を。

恭也は今回の戦闘が終盤になって劣勢に甘んじたモノの、妹を守る事が出来た喜びを感じていた。

一方なのはは、いよいよ激化してきた白い少女による闘争に恐怖する。そしてあの金髪の少女の事を想う。

それぞれが思惑を胸に身内に事情を説明していた頃。

「……コイツのお陰……いや、コイツの”せい”か？」

自室へと戻ったアーカードはいつの間にか開いていた箱から取り出した黒い宝石を持ち上げ呟いた。

それはなのはの持つデバイス、レイジングハートと色違いに見える物。

先刻の極光。次元跳躍魔法と呼ばれるそれは間違いなくアーカード自身の命を奪うに値した破壊力を秘めていた。

その直撃を貰ってなお存命している自分。それは間違いなくこの黒いデバイスによる物だろうとアーカードは判断した。

アーカードの持つリンカーコアへの極光の直撃の際、このデバイスの防御魔法の展開で一命を取り留めたようだ。

「成程のう。鍵は魔力であつたか」

どうやらこのデバイスを収納していた小箱には魔力による施錠がかけられていたようだ。

それならば魔法資質を持たない者がどう頑張っても開けることは叶わないだろう。

インテグラやセラスに解錠が不可能だったのも頷ける。

ふと、アーカードは掲げた黒い宝石から感じる一つの思念に眉を顰めた。

「……この気配……」

彼女、いや、アーカードという存在にしては珍しい驚愕の表情を作る。

デバイスを見る少女は一瞬、両目を見開いた後

「はは……クハハ！ アハハハハハハ！ そうか、そういう事がグレアム坊や！」

月村邸に響き渡る狂笑を晒した。余りの笑いに涙さえこぼれている。

「なんともふざけた真似をする！　そうか、そうだよなあ！　お前にとって父とも言える存在だったものなあ！」

ゴシヤア！！

笑みから一転、宝石を握った拳を勢いよく机に振り下ろすアーカード。

人外の怪力を吸い込みきれなかった机は容易くその形を崩壊させた。

バラバラと床に落ちる破片。

その音を聞きつけたファリンがアーカードの部屋の前に駆けつけるが、少女の狂笑を聞いて入室はおろか声を掛けることすら躊躇われてしまった。

「そういう事か。成程成程。確かにお前の願望は自身の手による私の敗北と殺害だ。あんな所で殺される事を許すわけにもいかんよな」

ギシィ、と宝石を潰さんばかりに握り締める。

しかしデバイスは先の机と違い、アーカードの怪力を持ってしてもその形を崩す事はない。

そんなデバイスに向かって喜怒哀楽全てが混ざり合った複雑で、生き物として単純な笑みを向けアーカードは言った。

「久しぶり、糞餓鬼」



時の庭園

そう呼ばれる移動型の要塞が存在するらしい。

らしい、と言うのは管理局は勿論、外道に身を染めた魔導師であってもその存在を知るものがないからだ。

外観は居城そのもの。ただし、その中に住まう者は一様に”普通”ではない。

今やそこに存在する住人は三人しかいなかった。

いや、”生きている”という定義を少し広くすれば四人になるか。

ともかく人気を感じられない長い廊下を抜け、この居城の持ち主の部屋へと場所に移る。

「母さん、帰りました……」

先刻の金髪の少女がおずおずと母と呼ぶ女性の前に歩み出る。

少女は恐れていた、後悔していた。

母の求めるジュエルシードを確保できなかった事を。母の期待に応える事が出来なかった事を。

少女の使い魔である赤毛の狼も、それによる主へ行われるであろう折檻を予見し小さく深く唸り始めている。

しかし、少女の母

プレシア・テストロッサは娘へ向けて微笑んだ。

「よく、やったわフェイト」

「――え？」

フェイト、と呼ばれた俯く金髪の少女。

フェイト・テストロッサは予想外の母の言葉に顔を上げた。

使い魔のアルフでさえプレシアの言葉に絶句している様子だった。

「よくやったと言ったのよ。残念ながらジュエルシールドは確保できなかったようだけど。」

貴女は素晴らしい発見をしてくれたわ」

思わぬ賛辞に顔が綻んでいくフェイト。

これは現実か？ あの母が、以前のような微笑みを投げかけ褒めてくれている！

窮地を救われた事も相まってフェイトの目頭には涙が溜まっていく。

しかし、次いで放たれた母の言葉にフェイトは再び絶句した。

「あの白い少女。黒髪の化物の方ね。彼女をここに招くか捕らえなさー」

「え……」

嘘でしょ、とフェイトの顔から血の気が引いて恐怖に染まっていく。

「捕らえられれば重畳よ。せめて血液の採取だけでも遂げなさい。アルフもいればそれ位出来るでしょう」

あの化物から血液を入手しろ？　なんだそれは。本気で言っているのか。

体を半分にされ、内蔵を撒き散らしながら迫り狂い、牙を突き穿たれそうになった先の戦闘を思い出し体が震えだす。

全幅の信頼を寄せ、己の全てを構成するファクターである母の言葉でさえもフェイトは拒否反応を示してしまった。

「フェイト、母さんの望み、叶えてくれるわよね？」

笑った顔と濁った目を同居させた表情でプレシアは娘へと語りかけた。

そんな母に

「はい……母さん」

顔面蒼白でフェイトは頷いた。その目に、先とは違った涙を浮かべながら。

ライバル？ ただの敵だよ、もう一人の魔法少女だ
(後編) (後書き)

ようやくタイトル詐欺にならずに済みそうです。

次回は、吸血鬼、温泉へ。

日常話に絡ませにくいアーカードさんがどう動くか。
それは僕にも分かりません。

ここは血湯の町、海鳴温泉だ (前編) (前書き)

日常回。

今回、旦那がかなり軟化もとい崩壊気味です。
少女になったことでこんな一面も現れたんだ、と解釈して頂けると
幸いです。

ここは血湯の町、海鳴温泉だ (前編)

――魔導師戦

先日の金髪の少女と闘争を経て、アーカードは魔導師戦における戦術分析を行っていた。

「暴走体に魔導師、か。コレを喰らって平気な輩がいるとはねえ」

魔力を攻撃・防御手段に転換、運用する魔導師。

そのあり方により魔力による攻撃が有効もとい、それしか通用しない暴走体。

どちらにも質量兵器と呼ばれる、454カスールの銃弾は通用しないまでも効果は薄い。

内包する魔力と神秘により多少なりともダメージは与えられるが決定的な制圧手段にはなりえない。

「銀弾を湯水のように使ってもなあ。騎士団の財布も薄くなるわ」

まあ、拘束制御術式クロムウェルを展開すれば防御も糞もなく飲み込んでしまえるのだが。

しかしアレは切り札であり乱用は控えるべきだろう。

そろそろ管理局なる異世界の治安維持組織も顔を出す頃かもしれない。

吸血鬼という地球の怪物ミディアンの存在を異世界にわざわざ教えてやる必要も無い。

「アン？ 私に魔導師の真似事をしろ、と？」

誰もいない部屋で一人呟くアーカード。

「冗談だろう。あのふざけた格好を再び晒せと言うのか」

答える人間はいない。

「^{ジョンプル}英国人の美意識は分らんわ戯け。――む、確かにそうだが。だがのう……」

腕を組み唸る。

「ふむ……確かにソレならば魔力の運用も楽ではある」

アーカードが彼女本来の住処である暗闇、電灯の点いていない薄暗い部屋の中でナニかと会話をしている時

「アーカードさーん、温泉入りましょー」

アリサ・バニングスの声が部屋の外の廊下から聞こえた。

「……湯浴みの誘いだ。続きは念話か、次の闘争にて」

海鳴温泉旅館。

傍らに置いてあった浴衣を持つとアーカードは立ち上がり、旅館の一室を後にした。



「のう士郎」

「はい？ 何ですか？」

「私は女湯と男湯、どちらに入ればいいのかな」

「……はい？」

純和風の意匠を持つ旅館の廊下。

休日を利用して知人と共にこの海鳴温泉へとやって来た高町一家とアーカード達。

最初は

「大人数で湯浴み？ アホか、何故私の素肌を他人に晒さねばならん」

と誘いを断ったアーカードであったが

「日本独自の文化？ 公用湯浴み場など古代ローマにもあったろうが。……なに？ 美容効果？」

ピク、と忍の言葉に反応し

「ほうほう面白い。硫黄にそのような効果があったとはな。黒色火薬の材料、もしくは臭いだけの物だと思っていたよ」

何故かノリ気になって同伴することに決めたのである。

で、アリスに部屋から引っ張り出されたアーカードは先を歩く士郎にそっと話しかけたのだ。

アーカードが現在纏うのはJAPANESE浴衣。持ち前の黒髪も相まってか非常に似合っているのが当然で不思議である。

肉体年齢は十三歳位なのであろうが、胸はペツタンコである。もう一度が言うがペツタンコなのである。

「あ、ああ。そう言えばアーカードさんは男でしたね」

かつて来日、月村邸に訪れた時のアーカードの姿を脳裏に浮かべる士郎。

目の前の少女は、自分よりも背の高い大男であった事を思い出す。

「左様。私としてはどちらでも良いのだがね。しかしお前はいいのか？ 妻と娘の裸体を私に晒すような真似を許せるのか？」

ニヤニヤと笑う少女にグツと言葉に詰まる士郎。

非常に難しい問題だ。少女の姿をしていても中身は男。五百歳を超える吸血鬼、性欲なぞ当に枯れ果てているのであろうが、妻と娘がいるのであれば話は別だ。

うぐぐぐ、と頭を抱える士郎を少女はケラケラと笑っていた。

「ミス・アーカードはこっちですよー」

グイッと首襟を掴まれたアーカードは後ろ、頭上を見上げるとそこには怪しい笑みを浮かべる忍が立っていた。

「ぬお。いいのか？」

「いいんです。むしろ貴女を男湯に入れる方が問題ありますから、絵的に」

今日の宿泊客はアーカード達以外ほぼゼロ。つまり、アーカードが男湯に向かえば、そこには士郎、恭也、アー

カード、と とても後が怖い絵が完成してしまうのだ。
もちろん、後が危ないのは主に前者二名の高町親子だけである。
妻や娘に恋人、はてはアーカードにすらボッコボコにされてしまう
に違いない。

ズルズルと引きずられて行くアーカード。

「おい、放せコラ」

「駄目です。放っておいたら士郎さんと恭也をイジめるでしょう？」

「ぬふう」

ズルズル。吸血鬼はそのまま女湯へ引きずられて行く。

そんな折、アーカードは視線を先行くのは達へ向けた。
アリサとすずかの後ろを歩くのはは先程まで楽しそうにしていた
が、何かを考えているのか下を向いていた。

「どうしたなのは」

「あ、アーカードさん。……ううん、何でもないです」

最近アーカードへの態度がよそよそしくなってきたなのは。まあ無理もあるまい、とアーカードもそれを容認している。

己の見せた数度の戦場に加え、先日の金髪美少女の件が尾を引いているらしい。

説法は性に合わん、と自覚するアーカードは少女の悩みに触れるのを諦めた。

そうか、と忍に後ろ首を掴まれたまま頷こうとしたその時

「――キミ達かね。うちの子をアレしてくれちゃってるのは」

すれ違った浴衣姿の、赤い長髪と鋭い犬歯を持つ女性が殺気と魔法の気配を流し告げた。

浴衣から覗くはち切れんばかりの巨乳にすずか達は顔を赤く染める。

しかしなのはと忍は女性の発するソレを敏感に捉え睨み返す。

その視線をスルリとかわし女性は続けた。

「あんまりオイタがすぎるとガブリと行くよ――っ！」

その女性、アルフは狼を素体とし製造されたフェイト・テストアロツサの使い魔だ。

使い魔製造の時に、動物を素体とするのにはいくつかの理由とメリットが存在する。

その一つに、動物的本能が人間もしくは魔導師以上に優れている、という点がある。

そして、アルフはその長所を今、いかなく発揮”してしまった”。

主であるフェイトに敵対しているであろうなのは達を偶然にも見かけたアルフは警告と値踏みを含めて声をかけたのだ。

フェイトに匹敵する魔法の才を持つであろう白い少女とフェイトを圧倒した化物じみた実力を持った白い少女に。

悔っていた。主を安心させるため「フェイトの敵じゃないよ」と後で伝えようと思っていたアルフ。

その理由を探すためなのは達に声をかけた。

そう、かけてしまったのだ。

そうして彼女に帰ってきたのは予想外の返答だった。

「宣戦布告か？ 面白い、やってみろよ駄犬」

アルフは見た。自分と同じくらいの女性に引きづられている小さな少女。

そんな間拔けた格好をしている少女の、敵意と殺意が充満した奈落の底のような瞳を。

――ニゲロ

――クワレルゾ

狼の本能が全力でアルフにそう告げる。彼女は思わず後退してしまう。

喧嘩腰なアルフに食って掛かろうとしているアリサ。

おろおろと戸惑うすずか。

そんな二人を見て苦笑したアーカードは続けた。

「……闘争の空気ではない。命拾いしたな、使い魔」

その笑みから、攻撃的で、慈悲深いナニカを感じたアルフは後ずさった事と、見逃された事に歯噛みしてしまった。

アリサ達になんでもない、と告げ女湯の暖簾を潜っていくアーカード達を見送ることしかアルフには出来なかった。

・

「……アーカードさんの髪、綺麗ですね」

「そうだろうそうだろう」

「真っ直ぐで羨ましいです。私、クセっ毛ですぐに丸まっちゃうから」

女湯更衣室にて。

すずかが浴衣を脱ぎながら既に全裸、スッポンポンになったアーカードの黒い長髪を見てそう呟いた。

賞賛を受けた髪を持ち主で全裸のアーカードはスパーン！ と手ぬぐいで股間を叩き隠すと優雅に笑った。

……仕草がどこか親父臭いのは何故なのか。

「はははは。艶の秘訣は美処女の血よ。アリサとなのはで試してはどうかしら」

「ア、アーカードさん！」

卑猥にて、自身の正体を隠そうともしない言動に思わず赤と青の二色に顔を染めアーカードの後を追うすずか。

アーカードが扉を潜るそこには広大な湯の湖、すなわち露天風呂が彼女を待っていた。

思わず嘆息するアーカード。

「聞いてはいたが……日本の文化とは真天晴れ」

ほー、と彼女らしくもなく素直に驚いているらしい。

「ソイヤー！」

助走を着けて湯船に飛び込む極上の吸血鬼ことアーカード嬢。
普段の彼女らしくない行いなのはすらも驚き笑う。

「おお……これがROTEEN、これがONSENか！」

精神は肉体に引かれる、とは誰の言葉だったか。

バシャバシャと湯を波立たせ、はしゃぐ(?)アーカードは誰が見ても年相応の少女だった。

いや、年相応ならばもう少し落ち着きを見せるだろうか。

「アーカードさん？ 最初はつかる前に湯で体を流すですよ」

「そ、そうなのか？」

桃子が微笑みながら少女へ日本の温泉作法を教えていく。
湯から出たアーカードもそれに素直に従っている。

「そこに座って？ 髪、洗ってあげるから」

「応、認識した」

シャワー台の前に腰掛けたアーカードの後ろに座り、その黒髪を丁寧に洗い始める桃子。

それを見た美由紀が忍にボソリと呟いた。

「あの……アーカードさんって男性でしたよね。しかもお父さんや恭ちゃんよりデッカイ」

「そ、そうだったかしら。何かもうあの姿見てたらどうでもよくな
ってきちゃった」

目を閉じて頭を洗われている吸血鬼の背中。その白すぎる美肌に嘆
息つく忍にまた嘆息してしまう美由紀であった。

「うえーい」

湯船に使って親父臭い言葉を発するアーカード。

しかし突っ込む者はいない。なぜなら皆一様に同じような言葉を発
しているからだ。

「その頭に手ぬぐいを乗せるのも日本の作法なのか？」

「んー。私も知らないです。そういえば何で頭に乗せるんだろ？」

目の前で湯船につかるなのは頭上を見てアーカードが呟いた。ち
なみに彼女自身は長い髪を纏めるためにソレを頭に巻いていた。

心地よい熱さを持つ湯に緊張が緩んでいるのか、なのはもアーカー
ドの質問に素直に答え、自身も疑問に思う。

その疑問に念話で答えたのはユーノだった。

『頭に乗せれば湯につかるとき、タオルの置き場所に困らないんで
すよ。』

それに寒い場所なら暖めたタオル、逆に暑かったら冷ましたタオル、
といった様に状況に応じて頭部への効果が見込めるんです』

『ほーう。日本ではなく異世界にもそんな文化があるのか』

『遺跡調査で湯浴みをする時に、現地で掘り当てた温泉とかに入っていましたから』

なるほど。サバイバル知識か、とアーカードとなのはうんうんと頷いた。

『してユーノ』

『はい？』

『貴様、何をシレっと女湯に入っている』

ギロオ、とアーカードの定番となった殺い（殺意を含んだ、という意味）視線がアリサの胸元で湯につかる小動物へと刺さる。

『い、いえ。最初は抵抗してたんですが、彼女達に無理やり……』

『この淫獣め、卑猥な形め、雄、出歯亀』

『形て！』

『ユーノ君は男の子だけど人じゃないから大丈夫なの』

なのは未だにユーノの正体に穴が開いた認識を持っているようだ。アリサからユーノを取り上げてその小さな胸に抱くのは。

ユーノが途端に顔を真っ赤にして暴れだす。それを見たアリサやすずかは大笑い。フェレットのくせにー、とからかう。

『命拾いしたな使い魔』

『ち、ちっがーう！ 助けてアーカードさーん！』

女湯からけたたましい動物の鳴き声が聞こえたという。

・ ・ ・

「アーカードさんは女の子……アーカードさんは女の子……ブクブク」

「と、父さん。怖いんだが……」

こうして長い闘争における束の間の休息、海鳴温泉を満喫する一同であった。

ここは血湯の町、海鳴温泉だ (前編) (後書き)

インテグラ「湯を朱に染めよ」

とか聞こえてきそうな次回です。

ここは血湯の町、海鳴温泉だ（中編）

深夜。

虫の声と五月の風を感じ取ることが出来る海鳴温泉旅館。

客として訪れていた高町家ご一行は夕食、宴会、夜更かしの遊びを経てそれぞれが眠りにについている。

そんな中。男女、大人子供別に分けられた部屋の隔たりを超え、会話による会議が行われていた。

議題はもちろん、ジュエルシードと先刻廊下で出会った女性についてである。

『あの人は多分、あの子の関係者だと思います』

ユーノだ。アリサに抱きつかれ顔を赤くしているのに真面目な顔だ。

『月村家で襲撃してきたって言う女の子かい？』

士郎が答える。士郎と恭也はアーカードの精神感応の補助を受ける事で簡易的な念話を可能としていた。

『そして使い魔だろうな。あの小娘の匂いがプンプンしたぞ』

アーカード。主従の間に繋がるパイプラインから発生する魔力を感じずとも、匂いで分かるとはやはり人外である。

『ここに現れたってことはジュエルシードがここに？』

恭也が眠る忍の横で顔を顰める。

『警告の意味も込めて姿を現したのだろう。しかしこの旅館の周囲にジュエルシードがあるのは間違いあるまい』

『うん、感じるの。まだ発動してないみたいだけどこの感覚はきつとジュエルシードだよ』

アーカードの言葉に頷くなのはもビリビリと無色の魔力を旅館の外から感じるようだ。

同意するユーノも部屋の外、襖から覗ける旅館の中庭を睨む。

『では行くぞ』

ゆっくりと身を起こすアーカード。なのはとユーノがアリサとすずかを起こさないように私服に着替え後に続く。
そして先を歩くアーカードに気付かれないよう、ユーノがなのはだけに念話を改めて飛ばした。

『なのは』

『なあに？』

『やっぱりこれ以上巻き込めないよ。アーカードさんの事もそうだけど、これからはもっと激しい戦いがあると思うんだ』

『……』

言葉を交わさない金髪の少女。言葉を必要としない白い少女。

二人の交える刃と血は先刻の闘争でなのはとユーノに改めてその危険性を認識させていた。

士郎と恭也はアーカードに及ばずともそんな闘争に身を染めた者。ユーノ自身は荒事に向いてはいないが、魔導師としてこの件を治める責任があった。

だがなのははどうだ？

ユーノは思う。心優しいこの少女はこれ以上こんな馬鹿げた闘争に関与する必要は無い、と。

だから今回の旅行を機にこの件から身を引いて貰うべく声をかけたのだが

『はじめはユーノくんのお手伝いだったけど、今はもう違う。自分がやりたいと思ってやってることだから。それに皆の戦いが危険だっていうのなら、私はそれを止める。ううん、止めなきゃいけないの』

なのはの決意は固い。

今回の旅行でアリサやすすか、その周りにいる大切な存在を改めて確認したなのは。

彼女は思う。

——金と白の少女は違う。

後者は純粹に闘争を渴望する哀れな異常者だ。だが前者は寂しい目をした一人の女の子だ、と。

自分は言葉を投げることしか出来ないけど、戦うよりはずっと良い、と。

なのはの視線からそれを汲んだユーノはうな垂れ頷く事しか出来ない。

ならせめて、自分はこの少女を応援し守り抜こう。

ユーノも決心を付けた。



「よっし、封印、と！」

「うん。一つ確保だ」

なのは達が駆けつける前にジュエルシードを封印し終えたフェイトとアルフは安堵の表情を作る。

不安定な発動によってジュエルシード本来——というのはおかしいが——の暴走状態に移行させることなく無事封印する事が出来た。ただの石となったジュエルシードを手握ったフェイトはそれを見つめる。

これで残る案件は一つ、とフェイトが震える体に気合を入れた時

「あ、貴女は！」

高町なのはの声が中庭、棧橋に月を背に立つフェイトとアルフの耳に届いた。

「あら、あら、あらあら。私言ったよね、オイタがすぎるとガブっ
と行っちゃって」

不適な笑みを浮かべ、駆けつけたなのはを牽制するアルフ。

だがユーノは彼女の体が不自然に震えていることを見抜く。
アルフの視線は、なのはを超えてその背後で彼女以上に卑しく笑う
白い少女に向けられていた。

「君が件の魔導師かい」

アルフの視線を受けてニヤニヤと笑うアーカードの前に士郎が歩み
出た。その後ろには恭也。

新たに二人の男性を確認したフェイトの顔がますます強張っていく。

「よかったら事情を教えてくださいませんか。俺達にも協力できることがあるかもしれない」

無駄な争いは避けたいという心情が見て取れる士郎の言葉。

彼は間違いなくなのはの父親だった。

だが、娘と違っていざとなれば刃を振るう事に躊躇いを見せない所
は士郎が御神の剣士である証だろう。

多勢に無勢。

なのはと恭也ならまだしも、今や恭也に劣るとは言え御神流師範代
級の實力を持つ士郎。

更に結界魔導師のユーノに加え、先日圧倒的な戦力を見せたアーカ
ードの登場にフェイトは勝機を見出す事が出来ない。

それはアルフにも分かるのだろう。低く唸り、悔しそうに唇を噛ん
でいた。

しかし今日の彼女達に戦う意志は無い。

「……私はフェイト・テストロッサ」

急に己の名前を明かした事に驚くのは達。
しかしフェイトは構わず続ける。

「母が貴女を招待したいそうです。……一緒に来ていただけますか？」

フェイトの視線と言葉の矛先がアーカードを捉えた。

悔しそうに、恐ろしそうにその言葉を搾り出すフェイト。

ジュエルシードとバルディッシュをミシツと音が出るほどに握り締めている。

予想外のフェイトの言葉になのは達は呆然としたままアーカードを見る。

当のアーカードですら一瞬呆けた表情を作ってしまったていた。

「ほう？ 私を？ 吸血鬼を家に招く事がどんな意味を持つのか知らんのか」

吸血鬼、という単語に首を傾げるなのはとユーノ。

そもそもその言葉の意味を知らないフェイトは怪訝そうな顔をしたものの、再び告げる。

「私達に戦闘の意思はありません。来て頂けるのであれば、これは差し上げます」

フェイトがなのはに何かを投げて寄越す。

あわわ、とそれを受け取ったなのはが自分の手を見ればそこには封印処置の施されたジュエルシードがあった。

まさか戦うことなくジュエルシードを確保できた事に笑みを零すのはとユーノ。

事情の説明はないのか、と恭也と士郎が声をあげようとする

「いいだろう。レディの招待だ。断る理由はない」

アーカードがそれを制した。

「アーカードさん!？」

なのはを含め士郎達が声を上げる。

未だ敵とも言えぬ存在であるが、襲撃者であるフェイトの誘いを即決、承諾したのだ。

『母というのは黒幕だろうよ。いい機会だ。私が直々にご尊顔を仰いで来てやる』

アーカード自身は勿論、フェイトの事も含めて心配する士郎達は、アーカードからの念話を受け渋々承諾する。

確かに彼女なら万が一、いや京が一にも命の心配なぞありはしないだろう、と判断したからだ。

『なに心配するな、私にはコイツがある』

チャリ、とコートから取り出した黒い宝石をなのは達に見せる。

それを見たユーノがいち早く反応を示した。

『デバイス?! いつの間に?!』

クク、と笑うアーカードはフェイトとアルフが展開した転移魔法陣に足を入れる。

「では征くか。異世界の旅なぞ生まれてこの方六百年、経験した事が無い。心躍るのう」

「ま、待って！」

なのはの言葉を背に、フェイトとアルフ、白い少女はこの世界から姿を消した。



時の庭園。

荒れた中庭、かつては緑茂る自然の箱庭だった事が伺える光景を背にアーカードは古城へと足を着いた。

「oops. 転移魔法とは気持ちが悪いな」

転移酔い？ 新鮮な体験であったが頭を襲う気分の悪さに毒づく吸血鬼。

ふらつく頭を押さえるアーカードに向かってフェイトが声を掛けた。

「こっちです」

「……早く来な」

アルフの催促もあってアーカードは目の前を歩き出す魔導師と使い魔の後に続いた。

歩きながらフェイトは考える。

——母さんはこんな化物に何の用事が？

傍に控えるアルフは考える。

——コイツは普通じゃない、尋常じゃない。……フェイトだけは私が守る。

後ろを歩くアーカードは考える。

——ブラン城を思い出すわね。今思えば私の趣味も大概だったなあ

長く薄暗い廊下を経て、アーカード達はこの古城の主が控える部屋の大扉の前に辿り着いた。

「……ここです。母がお待ちしてます」

「ご苦労。して、お前は処女か？」

「なっ!？」

突然の言葉に顔を真っ赤にしてアーカードを睨み返すフェイト。

「前回聞きそびれたからな。お前は整った容姿をしておるし中々に面白い心体を持っているようだ。どうだ、私の眷属にならんか？」

ニヤ、と笑う化物にフェイトは視線だけで拒絶の意を示す。

隣に立つアルフも犬歯をむき出しにしてアーカードへ敵意と殺気を

放っていた。

「その反応だけで濡れちまいそうだ」

くくく、と笑いアーカードは目の前に聳え立つ大扉を潜った。

後に残されたフェイトとアルフはその後姿を見送り、母の無事を願
い、自分の無事を喜んだ。

・
・
・

「よく来てくれたわ」

「よくも呼んでくれたな」

私室、というには生活の匂いが無く、接待室、というにはその趣も
感じないただ広い部屋の中。

”稀代の魔女”と”極上の化物”が視線と言葉を交わす。

それだけでお互いはお互いの本質を看破した。

「化物ね。……素敵な目。私、そんな純粹に濁った目は好きよ」

「魔女め。化物と対峙するお前は何だ。人か、それとも狗か」

ギチギチ

同じように全く違う質の闇がお互いを飲み込まんと膨れ上がる。

「その不死性。分けて貰えればと思ったけど、無理そうね」

「やはりそういう事か。人を捨てたいのか。狗ではなく糞だよ貴様」

——言葉なんかいらなかった。

二人は両極端に立つ自己中心者。

片や自分が大好きで、片や自分が大嫌いで。

大切なナニカのために、糞つたれなナニカのために。

自分とは対称的な眼前の”敵”^{じぶん}を見て

——ただ奪うだけ。

”自分”^{てき}を奪うために

「「私はお前が大嫌いだ」」

鉄火を抜いた。



顛末はとてもシンプルだった。

アーカードは魔法に触れた事のないただの強すぎる戦士。

一方、条件付きとは言えオーバーSに届く魔導師であるプレシア・テストロッサ。

そんな二人による魔導師戦の結果は火を見るより明らかだ。

部屋の外で待機していたフェイトとアルフは、扉ごと消し飛ばし、廊下を焼き払ったプレシアの極光を見て急ぎ部屋に駆け込んだ。

そこには

「……フェイト、その死体をラボに運んでおいて頂戴」

無茶な魔法の行使により負担がかかり、血を吐くプレシアと

「か、母さん！」

剥き出しの骨に、弾け、焦げた肉が覆いかぶさりぐしゅぐしゅと赤い液体を噴出している少女、

肩から上、首を消失させた白い少女の肉体がユラユラと立っていた。

「心配なんか必要ないわ……ああ、首が無い位で喚かないで。早く運びなさい。私は準備で忙しいの」

口元を押さえ、部屋の奥へ退こうとする母にフェイトは更に声量を上げた悲鳴じみた言葉をぶつけた。

心配？ 心配するに決まってる。

——首を消し飛ばした？　それだけ？

「母さん！　避けて！！」

「！」

ゴッオオオオン

その場を飛びのいたプレシアは驚愕する。

自分のいた場所が、凶悪な魔力の塊によって抉り取られた事に。
その魔力を”首が無い”少女が発した事に。

”白い”質量兵器しか保有していないはずの化物が、”黒い”魔導兵器を掲げていた事に。

「化物……」

そうだ、失念していた。

彼女は、白い少女は、アレは！

——極上の化物だったのだ！

爆ぜた顔の部分で、赤い光を帯びたどす黒い血が再びあるべき姿へ

と形を取り始める。

そしてそれは、血だけではなく同色の魔力光を伴って少女を包む。

未だ完全な修復を終わっていない口で、赤と白の少女と黒い拳銃が言葉を発した。

『対魔導師戦闘用13mm拳銃”ジャッカル?”』

ジャッカルを元にした、魔法戦専用弾使用銃です

全長40cm、重量18kg、装弾数8発。先代を超え、もはや魔導師ですら扱えない代物です』

「専用弾、13mm炸裂魔法弾……」

——チャキッ

「弾殻は？」

『魔法外殻 古代ベルカ式加工弾殻』

「装薬は？」

『ミッドチルダ魔法薬筒…MMA』

「弾頭は？ 炸薬式か？ 今更、水銀か？」

『Non, 自動練成済みの魔力弾頭でございます』

「パーフェクトだ、”ウォルター”」

『感謝のきわみ』

吸血鬼と死神が、魔女へとその牙を向けた。

ここは血湯の町、海鳴温泉だ (中編) (後書き)

未だ原作5話で。ごわて！

ここは血湯の町、海鳴温泉だ (後編)

「久しぶり、糞餓鬼」

『お久しぶりでございますアーカード様』

「お前は誰だ。私の主に仕え、私の主を裏切り、私に倒された馬鹿な男か」

『人格搭載型インテリジェントデバイス。それが今の私でございます。』

30年前の飛行船事件で回収された血液から採取、調整された遺伝子情報を元に人格移植、製作された第三世代デバイス。

名前は未だ持ち合わせておりませんが、そうですね、貴女がよく知る馬鹿な男ですよ私は』

「よく喋る。ならば貴様は知っているのだな。貴様の行く末を、否、逝った末を」

『無論でございます。屠った”彼女”、沈み行く飛行船のボルト一本までもこの脳裏に焼きついております故』
データベース
デウスエクスマキナ

「ならば貴様は今何を望む。私の敗北か、貴様の勝利か」

『それも無論でございます。ワルシャワよりの我が悲願。それは吸血鬼アーカードに勝利する事。

このような些事で死ぬなどお嬢様がお許しになられても私が許しません』

「よく言う。アレは最早私だけの愛しい主だと言っただろう」

『ハハハ。死した老人に鞭打つのは簡便して頂きたいものです。ともかく”あの私”と”この私”は別人でございます故。

願う頂^{いただき}が同じであろうと、未だ私の仕えるべき主はインテグラお嬢様ただ一人でございます』

「ハ！ 私のデバイスなのだろう？ 私の執事^{バトラ}ではないのか」

『ご冗談を。私が何だかは貴女が一番よく知っておいでのはず』

「……そうであったな、”死神”、——ウォルター・C・ドルネーズ」

『やはり私が冠す名はその罪と欲の象徴こそ相応しい。どうぞ貴女が死ぬその日まで、貴女の夢の狭間が終わるまで、よろしくお願いします、アーカード様』

それは、死から逃げられた吸血鬼が死神と30年を経て合間見えた時の会話。



「……馬鹿馬鹿しい。何なのソレは」

紫の極光をいくつも放つプレシアが吐き捨てるように呟く。
幾度も焦がされるアーカードは笑みを崩さず、弾ける体を少しずつ

プレシアへと近づけていく。

「ソレとはドレだ。このウォルターか、それともジャッカル？か、いやいや私の事かなもしかして」

漆黒の巨大な拳銃、・454カスールと対をなすその成り。

ジャッカル？を掲げてアーカードはこの瞬間顔が弾け飛んだ事も気にせず歩みを進める。

「命の略奪に隷属。なるほど、不死性の秘密は貴女の存在そのものね」

地面に付着したプレシアの血を、進める足裏から啜った赤を纏った白い少女。

アーカードという吸血種の在り方を数分の攻撃と瞬時に肉体を復元する少女から看破するプレシア。

天才の名を欲しいままにした魔導研究者の名は伊達では無い。

「その通り。私は怪物、ミデイアン不死者、ノスフェラトゥ吸血鬼」

彼女本来、彼本来の真紅のオーバーコートをバリアジャケットとしてその体に羽織らせた少女が着実に距離を縮めてくる。

「私はアーカード。王立国教騎士団HELLSINGが営営100年を賭けて作り出した最強のアンデッド——吸血鬼アーカードである！」

お互いの距離が五メートルとなった瞬間、アーカードが振り上げたジャッカル？から真紅の魔力弾が噴出した。

「っ」

プレシアの展開する防御魔法がそれを防ぐ。
しかし直撃した瞬間

「（なんて魔力！ 構成も構築も組成も過程も無視したただの魔力の塊がこんな！）」

それは違う。

インテリジェントデバイスの管制人格であるウォルターによって武装展開されたジャッカル？。

その弾丸は対魔導師、魔法戦専用弾として彼が構築したアーカードの魔力を破裂せんばかりに詰め込んだ魔力弾だ。

プレシアが感じたのは膨大に荒れ狂う魔力の奔流。

それはアーカードという存在と彼女の魔力を忠実に内包した魔力である。

「ほう、中々に愉快。これが魔導師戦か」

『左様でございます。魔導師には魔法を。防御魔法には圧倒的な魔力を。敵には慈悲なき戦火と鉄火の鉄槌を』

「重畳重畳！ 褒めてつかわす執事ア（バトラー）！」

『恐縮でございます』

ゲラゲラと笑いあう吸血鬼と執事。

既に古城を行きかう極光の色は紫色から血の色へと変わっている。

フェイトとアルフは巻き込まれないように彼女達なりの精一杯で防御魔法を展開することしか出来ていない。

アンチキリストからアンチウィザードへと変貌を化したアーカードの牙、もしくは死神の銃弾が容赦なくプレシアを襲う。轟音と発光でその戦場がかつて研究室であった事は最早伺えない有様になっていた。

「調子に乗るな化物！」

しかしアーカードが相対、敵対するのは稀代の魔女と言われたオーバース魔導師のプレシア・テストロッサ。次元跳躍魔法を行使する彼女の本気はただ防御するだけに留まらない。

「フォトンランサー・フアランクスシフト！」

トリガーワードと共に展開生成された紫色のフォトンスファイアは38基。

これらから毎秒七発で、計1064発という膨大な数のフォトンランサーが打ち出された。

荒れ狂う戦場において、己の切り札と同じ魔法を詠唱破棄した状態で打ち出す母を見てフェイトは息を呑む。

フェイトの魔法の師匠であったリニスはプレシアの使い魔である。ならば同じ体系の魔法が使えても何ら不思議ではない。

しかし、フェイトのそれとは威力も速度も段違い。

千を超える大魔法の直撃にアーカードの笑い声はかき消されてしまった。

「――凄い、凄いぞ」

かに思えた。

「痛い、痛いぞウォルター！ 見ろよ、肺が丸見えだ肝臓が無い骨盤が焦げてるぞ！」

『何故わざわざ喰らうのです。リンカーコアを防御するのは中々に負担が大きいのですよ』

「ハハハ！ 許してくれよウォルターア、私に死ぬ事を許してくれよ死神イイイ」

『Non. 絶・対・に！ 許せませんな』

半径五メートル程に散らばり溜まった血と臓物の海から這い出す赤と白の吸血鬼。

ズロオ、と水音を伴わせた姿にフェイトとアルフは絶句する。

プレシアでさえ唇を噛み、吐血以外の出血を許していた。

「絶命する程に吸血すれば貴様の命を丸見えだ。なあ、飲ませてくれよ魔女」

ジャッカル？と、454カスールを交差させた姿を取るアーカードにプレシアは鼻で笑うことで返答した。

「お断りよ。私は人間のままで死にたいから」

「ほう？」

「そして貴女は化物まま死になさい」

再びフォトンランサー・FSがアーカードを襲う。

プレシアの言葉を聞いたアーカードは日本に来てから一番か二番目に素敵な笑顔を浮かべていた。

二度目の大魔法の使用で派手に吐血するプレシアの姿が焼き滅ぼされていくアーカードの目に映る。

そして、娘のフェイトに何かを指示し、何かを受け取る姿も。

『アーカード様』

アーカードの本体に宿るリンカーコア”だけ”を防御するウォルターが告げる。

『何か来ますぞ』

「来い！」

バラバラに砕け、燃え、焦がれる姿でアーカードを誰かを抱きしめるかのように腕を広げた。

「二次案の貴女の事は諦めるわ。貴女のような危険な存在を娘に投与するわけにはいかないもの」

プレシアが掲げる腕に握られるのはジュエルシード。

そこからアーカードとプレシアが保有する全魔力を凌駕する膨大な魔力が発生する。

「消えなさい。二度と私の前に現れないで」

瞬間、その無色の魔力を制御化においた稀代の魔女の一撃が、アーカードを消し飛ばした。

・ ・ ・

戦場となったプレシアの研究室から外の中庭までに広がる巨大なトンネル。

見る人が見れば広大な通路のようにも思えるそれは、プレシアが最後に放ったジュエルシードを従えた攻撃の名残である。

アーカードはおろか、彼女の残滓である血液すら残す事を許さなかったその圧倒的な魔力は

時の庭園の十分の一を消失させる程の威力を誇っていた。

何も残っていない跡地にて、” 運よく巻き添えを食らわなかった” フェイトとアルフ。

腰を抜かして座り込んでいる彼女達にプレシアは告げた。

「渡したジュエルシードは授業料だと思っておくわ……。

……何をボサつとしてるの。新しいジュエルシードを探してきなさい」

「は……は、はい、母さん」

先の光景が頭を離れない。

” あの” 化物を肉片一片たりとも残さず滅したあの極光。

どう転んでも自分には使う事の出来ない大魔法に心を奪われてしまった娘、フェイト。

立ち上がりアルフと共に地球へ向かう時

——ごめんなさい……

と、安堵と共に小さくない罪悪感を抱いた。



「アーカードさん、大丈夫かな」

なのはが呟く。

いくら苦手になりつつある人の事でも一応知人であり友人だ。心配しないわけがない。

彼女達は現在、五月とはいえ寒さを残す深夜の旅館の中庭にて、姿を消したアーカードを待っていた。

「私の事だ。なんとも無いだろうさ」

「いえ、しかし敵の本丸に挑んだんです。アーカードさんでももしかして……」

恭也が返答する。

「心配するな。彼女は闘争の権化だ。悔しいし残念な事だが、彼女の死ぬ姿なんて想像できないな」

士郎が寒さに体を揺らす。かれこれ三十分しか経っていないが、た

だ棒立ちするのには中年の士郎には堪える物があるらしい。
士郎に続いてユーノが呟く。

「あの少女、フェイトさんはなのは以上の魔導師です。そんな彼女の母もしくは黒幕である人物が普通であるとも思えません」

ユーノとてアーカードの身は案じている。

しかし彼は先日目の当たりにした次元跳躍魔法を思い出す。不吉な想像をしてしまうのも無理はない。

「いや、だからなんとも無いと言っておろうが」

「「「えっ」「」」

四人がハモる。

なのは達の中心、彼らが座り込んでいる栈橋の中央に立つアーカードがシュタツと片手を上げた。

「ヤアミナノシュウ、ロリが帰ったヨ」

「「「ええええええええ!!??」」「」」

なのは達の絶叫が木霊する。

「うるさいわねえ……んにゃあ」と、アリサだけが反応したのが幸

이었다。

「ア、アーカードさん?!」

「応、それは私だ」

「アーカードさん?!」

「応、それも私だ」

「さっき異世界に消えた少女は?!」

「何を隠そう、それも私だ」

ズゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

・ ・ ・

「いつ帰ったんです?」

「うむ。ついぞ今だ。”殺され”てな。いやいや油断した。まさかジュエルシードを運用するとは思わなんだ」

カッカカと愉快そうに笑うアーカードに呆然とする一同であったが、恭也が言葉の一つに反応したようだ。

「殺された?」

恭也には思うところが多すぎた。

”あの”アーカードが殺された？

それでもなおこの場にいる？

「ああ。完膚なきまでに殺された。私の命を殺したのはこれで三人目だ」

かつて、百年前と五百年前に存在した宿敵を思い返す吸血鬼。

「殺された私がいた。殺されなかった私がいた。私はな、恭也。どこにでもいて、どこにもいないのだよ。いつでもいて、いつでもいないのだよ私はな」

首を傾げる恭也達。

その姿を見て再び笑い出すアーカード。

今の彼女は素晴らしくご機嫌だ。なぜなら殺されたから。

自分の死が、終わりがこんな所にあったから！

「なんていい夜だ！ 我が闘争の果てをここに見たり！

今度こそ、次こそは私を滅ぼせ！ 私を殺せ！ 虫の様に敵の様に

ゴミクズの様に！ 一切合切の容赦情け無く！

……猫なぞに頼った哀れで弱い私を、心踊り血沸く闘争にて……」

月を見上げ、壮絶な笑みを浮かべる少女を見て恭也達は改めて思う。

——そうだ、誰かこの化物を救ってやってくれ、と。

ここは血湯の町、海鳴温泉だ (後編) (後書き)

ちよい短めでした。

分かり合えん気持ちと新たな魔法使いだ (前編)

「艦長。救難信号です」

次元空間。

虹のように鮮やかで、毒々しい光景が広がるそこは世界と世界を繋ぐ船路。

次元世界の例えでよく出る、『次元世界は星の数ほど存在する』、とはよく言ったものだ。

地球人がよく知る宇宙を次元空間、宇宙に点在する数多の星々を次元世界と言い換えれば分かりやすいだろう。

異世界を繋ぐ宇宙、次元空間を航行するこの船は宇宙船と例える事も出来る。

時空管理局巡航Ⅰ級八番艦アースラは巡航ルートを航行中、とある世界から発信されていた救難信号を受信した。

「場所は何？」

緑色に輝く髪。地球では見る事の出来ないその地毛の色は、その持ち主の女性が地球人から見て異世界人である証拠。

通信官であるエイミー・リミエッタの報告を聞いたエインディ・ハラウンはすぐ様その詳細説明を求めた。

「第97管理外世界『地球』です。発信者は『ユーノ・スクライア』。あれ？ ……この子って確か搜索願いが出されていた子じゃ？」

信号に付属されていた現状記載内容に目を走らせ報告をしたエイミイとそれを聞いたリンディは思い出す。

発掘されたロストログアを輸送中だった次元輸送艦が襲撃を受け、同船に搭乗していたスクライア一族の子供が行方不明になっていたことを。

更に、そのロストログア自体も行方が分からなくなっていたことを。

「そのはずよ。うん、無事で良かったわ。すぐに救援スタッフを向かわせましょう」

若くして提督、艦長の座まで上り詰めたリンディは早い対応で次元漂流者救援用のマニュアルに従う。

次元漂流者は異世界に迷い込んだ異端者だ。早い対応がその漂流者の生死に左右する事を彼女は知っている。

アースラクルーへ救援任務の伝達を始めたリンディにモニターを見続けていたエイミーが声をかけた。

「あれ？ 記載内容に続きが……」

ユーノが発信していた信号には彼の現状、同じく地球に漂着したロストログアを搜索している旨、またそのために現地民の協力を仰いでいる事が記載されていたのだ。

それを聞いたリンディは眉を顰める。

「……軽率な行動ね。地球は確か魔法文明が無かったはず」

知人の提督の男性は確かその地球出身者であり高ランクの魔導師だ。しかし彼は一握りの存在。リンカーコアが活動していた珍しい事例であって、地球には本来魔法文明が存在しない。

つまり地球において魔法に関する事件事故に現地民へ協力を要請する事は管理法に抵触してしまうのだ。

「そのはずです。えっと……『地球における特殊治安維持組織、その構成員。また、魔法資質を持つ現地民とその家族に協力を要請した』とあります」

「組織？」

「先方の意思で組織名は記載されていません。ですが……その組織は管理局と接触した記録があるそうです」

「地球の組織と管理局が？ ……そんな事あったかしら」

その記録というのは30年も前の物であり、管理局が起こした事故によるものだ。

一般的に公にするわけにもいかない件であり、一職員である彼女達が知らないのも無理はないだろう。

「管理局を知る現地組織団体……か」

ユーノという少年は最初、自力でロストロギアを搜索しようとしていたのだろう。

軽率な行動ではある、と先ほど言ったりリンディであるが

異世界に悪影響が及ばないようロストロギアを一人搜索するその姿勢は子供ながらに見上げたものだとも思う。

しかし組織という、不特定多数の人間が所属する団体へ協力を仰いだ事は話が別だ。

もしそれが事実であれば、否、下手をすれば異なる次元世界同士の外交問題へと発展してしまうためだ。

更に最悪の場合、魔法文明を持たない地球のあり方を大きく変えて

しまう。
具体的には新技術、”魔法”の争奪のために勃発するであろう戦争等。

「それが事実であれば助かりますけどね」

だが件の組織は管理局との接触の経験があるらしい。
それならば当時の管理局側から口止めもしくは契約がされていることだろう。
魔法という存在の秘匿。それが行われているのであれば少し話も変わってくるのだ。

「そう、ね。それなら最悪の事態にはならないはず。
とりあえず救援を出しましょう。クロノは出せるかしら」

時空管理局執務官、高ランク魔導師であり息子の名前を出すリンデイ。

それを聞いて首を傾げるエイミィ。

「出せますけど……クロノ君を行かせるんですか？ 確かにロストロギア搜索にも着手するなら高ランク魔導師はいた方がいいですけど」

「どうも、ね……キナ臭いのよ。『ロストロギアの輸送』、『遭難』、『現地組織への協力要請』。

この流れが偶然による事故とは到底思えない。明らかに人為的なロストロギア強奪事件よこれは」

ユーノがこの救難信号を発したのはフェイトと出会う前である。
その時点で事故として救難信号を送ったユーノであったが、リンデ

イはこれを事件として判断したのだ。

故に執務官であるクロノを派遣することに決定したのであった。

「と、いうわけみたい。クロノ君、行ける？」

『ああ。問題ない』

エイミィの通信に、自室で待機をしていた漆黒の少年。

若干14歳にして執務官となり、魔導師ランクAAAであるクロノ・ハラオウンは力強く頷いて答えた。



次元空間より地球へ。

既にお馴染みの海鳴市。時刻もまたお馴染みの深夜となっていた。

先日の巨大樹騒動で倒壊を免れた数少ないビルの屋上で少女が小動物へと語りかけていた。

「のうユーノ」

「は、はいアーカードさん」

「私は数日前の闘争を経て以来すこぶる機嫌が良い。それは知っているな」

「え、ええ」

「しかし何故、今、たった今、NOW、今現在！ 私の顔に笑みが

無いと思う？」

「さ、さあ。僕には何も」

「アーン?!」

ガシ、とその胴体をアーカードに驚づかみされたユーノはキュキュ
! ? と反応する。

屋上故に風が強い。ポイ、と投げられれば地上へダイブでデスアン
ドヘブン。

加えてアーカードの握力が予想以上に強くユーノは突然に訪れた自
分の命の危機を感じてしまう。

「お前言ったよな? 四、五日で『時空管理局』なる組織が動く、
と。

あれから幾日経った? どれだけの時間が経過した?

私の感覚が正しければあの”進路相談”から既に二週間は経ったと
思うのだが?」

「い、言いました! でもあれは僕の予想で予測です! 予定じゃ
ありません!

次元空間というのは不確定な因果要素が多く詰まった海なんです!

この星みたく時間通りの航行なんか出来ないんですよ!」

ヒイイイ、とユーノが叫ぶ。

現在彼を持つ少女はビル屋上の縁。つまりあと一步前へ出れば落下
確実な場所に立っている。

つまり、ユーノ、ウィル、フォール。

飛行魔法が使えるとは言え怖いものは怖い。

「まあ確かにこの国、日本の、時間通り”すぎる”交通機関には私も少々不気味に感じるレベルだ。
だがそれにしたって遅すぎやしないか時空管理局。機嫌が良くなければ私、本国へ帰っているレベルだぞ」

「だから僕のせいじゃないですー！」

『アーカード様。どうかその位で』

意外な所で入った救援に地面へ降りる事を許され安堵の息をつくユーノ。

「ウォルター。私の”ユーノDE遊BOW”の邪魔をするなよ」

「遊び?!」

『いけませんぞアーカード様。動物へ対する虐待はこの国の法に触れる恐れがございます。』

戯れなれば、ユーノ様を人間へ戻すか、他人にバレないような場所でするに限るかと』

「ウォルターさん!？」

先日のアーカードの時の庭園からの帰還。

それに伴い彼女のデバイスとして紹介された漆黒の宝石、個体識別名称”ウォルター”。

アーカードに対して丁寧な物言いをするものの、どこか対等にやり取りを行うその様は往年の主従を感じさせた。

それによりなのはもとい士郎までも”さん”付けでデバイスを呼ぶ不思議な関係となってしまうのだ。

一方ウォルターはレイジングハートにまで様を付ける徹底した執事っぷりであったと言う。

「成程成程。郷に入れば郷に従えとはミス月村に限った言葉では無かったか」

うっかりうっかり、と舌を出すアーカードを見てユーノは悟った。

――あ、僕今玩具にされてる
と。

「なななのー！ 恭也さーん！ 助けてー！？」

哀れ小動物。アーカードの暇つぶしとはこういうものなのである。
南無。

さて。

アーカードは実際の所、管理局の到着の遅れなど気にはいかなかった。

ならば何故ユーノを虐めて暇を潰しているかと言う理由を説明する必要があるだろう。

現在彼女は地上でジュエルシードを搜索するのはと恭也の観察をしている所だ。

先日、プレシアに”殺された”アーカードはそのまま”自分の死”
アーカード
を利用することを思いつく。

化物が死んだと勘違いしたプレシア率いるフェイトとアルフは安堵

もしくは慢心した行動を展開するだろう。

その隙を、美味しい所で突く、ひっくり返す、最後の最後でぶち殺す。

それが現在のアーカードのプランであった。

——あの心躍る闘争をもう一度。人間そのものである欲と性、縮図を見せ付けたあの糞魔女との闘争をもう一度。

故、アーカードは認識阻害魔法を可能とするユーノを傍につけ、見晴らしの良い場所からなのは達の動向を見守っているのだ。

既に彼女にとってジュエルシードなぞ大した価値は持っていない。今の吸血鬼が望むのはたった一つの闘争のみ。

搜索については一応、身内への協力として付き合ってる程度だ。

『そう言えばなのは様。ご学友との間に衝突があったご様子ですが』

ウォルターが呟く。

温泉の一件以来ますますフェイトの事が気ばかりになっているらしく、なのはの表情は未だ晴れる事無く曇りがちだ。

それを見抜き心配するあまり親友のアリサはなのはと喧嘩のような衝突をしてしまったのだ。

すずかも親友の心配をしているものの、なのはの心情を汲み応援する、という立場を取っているらしい。

「知るかよ。子供の喧嘩に口を出せるほど、私は人間が出来ていない」

『人間が出来ていない、ですか。アーカード様が仰られると説得力がございますね。超受けます』

「……ふん」

仲が良いのか悪いのか分からない。

発動、契約をして間もないのにどうしてこうも息が合っているのか、と少女と執事を見たユーノは不思議に思う。

その時

『見つけたの！』

なのはからの念話を傍受する三人。

同時に市街を襲った魔力流。それはフェイトの物だった。

どうやらジュエルシードを強制発動させる事で発見、確保する算段のようだ。

『フェイトちゃん！？』

感じ取ったジュエルシードの元へ辿り着いたなのは、その前にフェイトが現れたらしい。

そしてその傍にはアルフもいるようだ。

報告を受けたアーカードは目論見通り、と口を歪ませる。

『よろしい。恭也と共にジュエルシードを確保しろ。私はもうしばらく様子を見る』

ジュエルシードの確保自体はアーカードは大事とっていない。

大事な事は、確保したにせよ失敗したにせよ、時の庭園と帰還を果たすであろうフェイトを追跡する事だ。

そうする事で再びプレシアと相對する事を計画しているアーカード

である。

「猫の力が常時使えれば話は楽なものになあ」

『あの”准尉を取り込むとは。やはり化物ですな貴女様は』

” シュレディングー”

アーカードが現在内包する数少ない命であり能力の一つ。

かつてミレニアムに所属していたヴェアヴォルフと呼ばれる化物部隊の構成員であり大隊准尉であった少年(?)だ。

その能力は哲学的な話で『不確定確率同時存在理論』とされる。

簡単に言えば『いくつもの存在が同位置同時刻に存在する』という事だ。

これを”どこにでも、いつでもいていない”とシュレディングー大尉とアーカードが称したのは成程分かりやすい。

ようは『死なない、神出鬼没』という事に他ならない。

一見無敵にも思えるこの能力だが、これを行使するにはアーカードの自己と自我を極大まで高める必要がある。

自分という存在を高めずにこの能力を行使すれば、以前のように自己を認識出来ず消失してしまうためだ。

故にこの能力を発動させるために必要なのは彼女なりの自己の確立、ようは『極限の闘争』である。

プレシアとの闘争時や、日本で最初に月村家へ襲来した時の高町親子との闘争時。

これらに及ぶレベルの高ぶりが無ければ、『存在制御術式シュレディングー』を使用することは出来ない。

つまり、時の庭園と再び赴くためにはフェイトを追跡するしか手立てがないのだ。

「使い勝手が悪すぎるわよこれ。

あのデブ。よくこんなジャジャ馬……もといジャジャ猫を飼いならしていたもんだ」

『あのデブですから』

「クク、確かにあのデブだしな」

デブデブと誰かを罵倒と賞賛する少女とデバイスは無視して、眼下で展開され始めたなのはとフェイトと戦闘を見るユーノ。

金と白の少女達は一言二言何か言葉を交わした様子だったが、高所からそれを眺めるユーノには何を言っていたかは分からない。

しかし、人外の者たるアーカードは確かに聞いた。

——言葉にしないと伝わらない事もきつとある

フェイトへ向けたなのはの言葉を。

アーカードは顔を顰める。不愉快極まりない、と言った表情だ。

「そうさ。だが小娘、知っているか？　言葉が無くとも伝わる事があるのだよ」

『暗黙の契約。闘争における唯一の理です』

「然り。杖を構え、戦斧を振り、銃を抜き、神秘を唱える。そら、それだけで伝わるコトがある！」

『然り。純粹な戦意、単純な敵意、反吐の出る悪意、踏みにじる害意etc etc。闘争に言葉など必要ありません』

「高町なのは。お前の言葉はまるで糞のようだ。その口から垂れるソレは何だ。」

お前の根底にある魂は何だ。本当に人間か？　まるで私のようじゃないかその有様は」

『可哀想な少女です。人たりえる私欲が感じられません』

「かつておっかなびつくり夜道を歩く弱い者がいた。しかしお前は夜道である事も気付かぬ愚か者。」

お前は皮は人間だが、魂は人間を捨てた化物だ」

『アーカード様とは似て非なる者でございますね。彼女は自分が好きすぎるのでしよう。自分を愛しているのですよう』

「私は私が大嫌いだ」

『私は貴女が大嫌いです』

「高町なのは。人でありながらの化物を内包する真逆者よ。私達に見せてくれ、人間の新しい可能性、恐ろしい可能性を」

『その時は』

——貴様は私達の愛しい愛しい敵となるのだから

分かり合えん気持ちと新たな魔法使いだ **(前編)** **(後書き)**

ユーノさんの連絡で管理局、若干早めに登場。
そしてアーカードさん、不穏発言。
どうなる海鳴、どうなる日本。
僕にも分からない！

分かり合えん気持ちと新たな魔法使いだ (中編)

「言葉だけじゃ何も変わらないって言ってたけど、話さないと、言葉にしないと伝わらない事もきつとあるよ!」

そうして自分がジュエルシードを集める理由を話し出すのは。

最初は手伝いだった。

しかし、周囲の大切な人達やフェイト達と出会う事で。

闘争を、己の死を望む異常者を見た事で。

自分は平和を望んで、それを魔法の力で叶える事が出来ると信じてこうしてこの場にいるのだ。

フェイトは黙ってなのはの告白を聞いていた。

先日までのフェイトなら問答無用でジュエルシードを確保するためになのはを言葉ごと切り伏せただろう。

だが、今のフェイトには黙ってなのはの話を書く義務があった。なのはの仲間である、あのもう一人の白い魔法少女。

彼女を自分の母が、自分が時の庭園に招き入れた事によって殺害されたという事実があるために。

人の死。

それを直接に自分の目で見た事ないフェイト・テストロッサ。

無論、この年で他人の死の現場なぞ見る者は少ないだろう。だがフェイトは見たのだ。

心強く、慈悲が一切無い極光が白い少女を焼き払った所を。

自分の恐怖の対称である化物を撃ち殺した母へはこれまで以上の妄信を。
忌むべき敵ではあったが間接的に自分が殺したという事へ罪悪感を。
フェイトはそれを感じてなのはの告白を聞かなければならなかったのだ。



「……と、言った所かな」

『意地の悪い。ピンピンしておりますな実際は』

黙ってなのはの話を聞くフェイトの姿を、はるか頭上から見下ろすアーカードとウォルターは呟いた。

『しかし異世界とは言え、やはり童は童ですな。私が若い頃は、ゴミ処理に躊躇など一片も感じた事はありませんでしたが』

「デバイスがほごくな。貴様はあの死神の模造品だろうが」

『おや。ご機嫌斜めでございますね。……やはりなのは様ですか？』

「ふん。気に喰わん、本当に気に喰わん。闘争の本質を見抜けぬ小娘が語る平和なぞ妄想ですら無い。最早糞だ糞」

『ククク、本当に似ていますな貴女方は』

「……二度目の死を経験してみるか？」

首に下げた黒い執事を握ろうとしたアーカード。

彼女は眼下で話す少女達、その正反対の方向である空を突然睨んだ。

「なんだ、この気配は」

『……空間への強制転移。転送魔法ですな。何者かが跳躍して来ますぞ』

デバイスとなったウォルターがアーカードの睨んだ空へエネルギー
測定をかける。

指定した空間に存在する”エネルギー”が増加を始めている。

これは何かもしくは何者かが空間へと割り込みかけ侵入を始めた証
拠である。

『40キログラム前後の質量……子供？』

歪み始めた空間から計測したエネルギーの総量は子供一人分に相当
していた。

その言葉を聞いたアーカードは少し離れた場所では達を見守っ
ていたユーノへと告げた。

「おいユーノ。認識阻害の精度を上げろ」

「…え、あ、はい。でも何故ですか？」

眼下にはなのはの元に駆けつけ、フェイトの傍に待機していたアル
フと睨みあう恭也がいた。

その場から目を離しアーカードを見上げ返事をするユーノ。

『ユーノ様、何者かがこの封時結界内に転移して来ます。登録されていない魔力パターンです。第三勢力の可能性があります』

「わ、分かりました！」

屋上に待機する二人と一機の存在感が更に薄まっていく。

これによって新たに介入する存在は自分達を見つける事は出来ないだろう。

『なのは様、恭也様。何者かが結界内に侵入して来ます。お気をつけ下さい』

ウォルターの念話を聞いたなのはと恭也は、フェイトとアルフと対峙したまま顔を強張らせた。

そして、一同が見守る場所、アーカード達がいる屋上から少し離れた空。

本来場に存在する魔力の他に、明らかに意思を持った魔力が発生する。

光の泡が現れ、それが人間の形を形成していく。

夜空に現れるその光は幻想的な印象をそれぞれに与え、

月明かりを背に、一人の少年が姿を現した。

「ここが……地球」

漆黒のバリアジャケット。

魔導師らしい意匠の杖型デバイスを持った黒髪の少年。

身長はアーカードと同じ位か。しかしその顔に浮かんでいるのは年

不相応の戦士のソレである。

「っ！ 魔導師！」

黒い少年は眼下で対峙しているのはとフェイトを発見する。

飛行魔法でその頭上へ移動した少年はデバイスを掲げて声高々に宣言した。

「時空管理局執務官、クロノⅡハラオウンだ！ 詳しい事情を聞かせて貰おうか？」



——管理局！？ 早すぎる！

頭上に現れた黒い少年を見上げフェイトは内心焦る。

母の予想によれば管理局の介入はもう少し後になるはずである。

想定外の敵となりえる存在の登場にフェイトはバルディッシュを握る手に力を込める。

隣に立つアルフも低く唸り声を上げていた。

管理局の早すぎる到来。

それはユーノが発信した救難信号。

アーカードが所属する組織の意向、『管理局との接触』を受けて発信される予定の無かった難信号が原因である。

それを知る由も無いフェイト達はなのは達を無視し、離れた場所で未だ不安定な発動状態を保つジュエルシードへと走る。

「おい君！ 何をつ」

それとほぼ同時になのはも駆け出した。

「なっ、君もか！」

クロノが驚きの声を上げる下、二人の少女はお互いのデバイスを交差させる形でジュエルシードを捉え

「「ジュエルシード、封印！」」

二人の、天の才を持つ魔法少女の魔力が交差しジュエルシードへとそそがれた。

「馬鹿な！？ ロストログアに向かって何て馬鹿な事を！」

急ぎクロノがその場へ飛び、二重の魔法陣を敷き、術式を展開する。混ざり合ったのはとフェイトの魔力。それによる指向性を持たなくなった魔力の影響を受けてジュエルシードが暴走状態に入る事を防ぐためだ。

クロノが展開した術式、それは複数の魔力を制御する高度な魔法。なのははもといフェイトにも使う事の出来ない超高度技術であった。

『やりますなああの少年。あの年で複数の魔力制御を可能とするとは』

「あれが『管理局』か。子供じゃない」

その光景を見守る恭也とアルフ。更に屋上から見下ろすアーカードとウォルターが呟いた。

三人の魔法使いによりジュエルシードはその鼓動を停止。安定状態へと移行した。

そして

そのジュエルシードを中心に睨みあう少年少女。最初に口火を切ったのはやはり少年だ。

「……馬鹿な真似を！ 封印術式を複数同時展開するなんて、封印どころか暴走を助長する行為だぞ！」

激怒するクロノの迫力に気圧されたなおはビクッと体を震わせた。その様子を見てクロノはため息をついた。

「そうか、君が報告にあった現地協力者の魔導師か」

成程。それならばあの行為も頷ける。魔法に触れて間が無いのだろう。

「知らなかった、では済まない行為だが、とりあえず今はその事より事情を——」

聞かせてくれないか、とクロノが喋ろうとしたと同時、赤髪の女性、アルフの蹴りがクロノを襲った。

しかしそれを紙一重でデバイスで受けたクロノ。そのままアルフを睨んで告げる。

「……何のつもりだ」

「煩い！ アンタ達に構ってる暇はないんだよ！ フェイト！！」

「っ！」

フェイトがアルフの吼えを受け、呆然とするなのは前からジュエルシードを奪い取る。

クロノはアルフの蹴りを受けていて動けない。

「ません！」

唯一動ける恭也がそれに反応しようとしたが

『何の、問題は、ない』

恭也の脳内に強制的な思念が襲う。

念話ではなく精神感応。

それははるか頭上からその現場を見下ろす吸血鬼の仕業である。

完全な支配下に置かれる程弱くはない恭也は動きが鈍った体でアーカードを睨んだ。

なんのつもりだ、とその視線は言っている。

すぐ様転送魔法を展開したフェイトによって、アルフ共々彼女らはこの場から姿を消した。

『あの小娘には私の使い魔を付けておいた。これで奴らの砦は我が地図に記された同然よ。

あとはゆるり侵攻^{インベイド}アンド進行^{マーチ}の準備を整えるのみ』

くっ、と唇を噛み恭也は自由になった体を建物に体を埋め込んだクロノの元へと向けた。

「立てるかい？」

「す、すまない……あ、いえ、すいません」

自分より遥かに背の高い年上の男性の介抱に管理局員から年相応の姿で反応をしてしまうクロノ。

恭也の腕を借りて立ち上がったクロノは、姿を消したフェイト達が残した転送魔法陣の残滓を睨んでいた。

「クソ、逃がした。あれが襲撃者か」

報告には無かったが、母の予想した今回の”事件”の犯人グループ。あの少女と女性がその一味であろう、とクロノは先の様子を思い出し判断する。

ならば、自分の目の前に立つこの男性と白い少女は現地民協力者だろう。

「怪我はないかい？」

「はい。あったとしても僕の油断が招いた自業自得です。それより、事情をお聞かせ願えますか？」

恭也に対しては何故か敬語になってしまうクロノ。

本人も不思議に思ってしまうが、自然に思えるのも何故だろうか。

「凄いな君は。分かった、だったら説明するに当事者のユーノがいた方がいいだろうな」

「ユーノ……スクライアの少年ですか？」

「ああ、それともう一人の協力者の――」

「アーカード。英国王立国教騎士団HELLSINGのゴミ処理係、アーカードである」

ズルウ、と先ほどクロノが埋まっていたビルの側面から少女が”生えてきた”。

その光景に驚愕するクロノを見て白い少女は笑う。

「やった、やったぞウォルター。異世界人ですらこの私に驚いたようだぞ！」

『どちらが子供ですか』

そしてもう一人、なのはの足元に現れた小動物ことユーノが声を上げた。

「僕がユーノ・スクライアです。敵の介入かと思いい認識阻害の魔法で身を隠していました、申し訳ありません。貴方は管理局の方ですか？」

偉そうな少女と小動物の登場に頭を抱えるクロノはそうだ、と答える

「……随分と大所帯だな。魔導師三人に使い魔一匹か。ここじゃ何だ、僕らの艦に来てくれないか」

「俺は魔導師じゃないんだが……」

「僕も使い魔じゃないよ！」

「私も魔導師ではないんだがなあ」

「だあもう！ いいからアースラに来てくれ！ 艦長、転送ポートの用意をお願いします！」

『はい、今用意するわね』

開いた通信回線からリンデイが答える。

宙に浮かんだ画面、異世界の超技術に驚く恭也とアーカード。一同が展開された転送ポートへと歩を進める中、なのはは消えたフェイトの姿を誰もいない空間に追っていた。

「フェイトちゃん……」

兄の催促を受けて歩みだすなのはは、またも気持ちが通じなかった事に心を痛めるのであった。

・ ・ ・

「また謝れなかった……」

ジュエルシードと引き換えに大人しい方の白い少女とまた言葉を交わせなかった事に心を痛めるのはフェイト。

そんな主人の感情がラインを伝わり同じく俯くアルフ。
彼女は時の庭園に戻り、プレシアに管理局の到来を報告するつもりである。

重い気持ちを引きずり、歩くフェイトの影。

影は本来、その元となった主の動きを模倣する。

しかし、今のフェイトの影の一部。

そこに、光源を無視し不自然に蠢く”影”^{ナニカ}が存在していた。

分かり合えん気持ちと新たな魔法使いだ (中編) (後書き)

主要登場人物、これで揃ったでしょうか。

物語りも架橋に入りつつあります。

不穏な空気を見せる旦那がこれからどう動き何を思うか。お楽しみに、です。

原作より会話の少ないのはとフェイト。

この二人がどう分かり合っていくのか。

それも頑張って書いていきたいと思っています。

次の話で書き溜め終了です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6015y/>

魔法少女リリカルアーカード

2011年11月30日20時07分発行